愛媛大学教育学部

第137号

同窓会報

愛媛大学教育学部同窓会事務局

〒790-8577 松山市文京町３番
愛媛大学教育学部事務課内
☎(089)927－9383(直通) FAX(089)927－9395
E-mail:dosokai.ed.ehime@gmail.com

賀春

元旦

愛媛大学教育学部同窓会役員一同

経験と想像力

愛媛大学
教育学部長
小助川元太

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

今年度も残すところあと少しとなりました。振り返ってみると、新型コロナウイルスが第五類に移行した昨年五月以降、さまざまな制限がなくなり、ようやく社会生活もコロナ禍前の状態に戻ってきました。大学では会議の一部にオンラインが残っているものの、授業はほぼ対面となり、教員同士や学生たちと懇親会を行う機会も増えました。コロナ禍が始まった四年近く前のことを思い出すにつけても、人と直接会って話すことがいかに大切かということを実感する日々です。

とはいえ、世の中は明るい話題よりも暗い話題の方が多い印象があります。

たとえば、ウクライナへのロシア侵攻が始まりもうすぐ二年が経ちますが、いまだに収束する気配がありません。また、ハマスによるイスラエル攻撃を端緒としたイスラエルによるガザ地区への攻撃は激しさを増すばかりです。国内に目を向けると、新年早々能登半島を中心に大地震が発生し、建物の倒壊、津波、火災などで、多くの犠牲者が出ました。さらに、ここ数年は地球温暖化によると思われる異常気象が続いており、日本では台風や洪水による大規模災害が毎年起こっています。

まさにVUCAの時代です。VUCAとは、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をとった用語で、「変化が激しく複雑で、将来の予測が困難となった社会を表す語」（『デジタル大辞泉』）のことです。これからの社会を生きる子どもたちには、こうした時代を生き抜くためのスキルやリーダーシップが求められます。加えて、近年ではChat GPTに代表される生成AI技術など、急速な技術革新もあり、とくにデジタルネイティブといわれる今の若い世代は、それらをただ単に使いこなすだけではなく、人間の未来のためにどう活用するのかという視点も求められるようになっています。

ところで、私自身はデジタルネイティブではなく、人生の途中からデジタル技術を使うようになった、いわゆるデジタルイミグレイトですが、パソコンが世の中で普及し始めた頃に、ある大学の先生が、「これからは記憶することはコンピュータに任せて、人間は考えることに専念すればよい」とおっしゃったのを覚えています。ところがその後、本格的に研究者としての活動をし始めると、それが大きな間違いだということに気づきました。というのも、専門的な知識はもとより、学校で学ぶような一般的な教養や知識がないと、研究を進めるための気づきそのものが生まれないからです。しかも、いくらデジタル技術を活用しようにも、前提となる知識がなければ検索することもできず、検索できたとしても、提示された多くの情報の中から自分に必要な正しい情報を選び取って考えることもできません。

今、大学で深刻な問題となっているのは、生成AIを使ってレポートを書く学生が出てきていることです。生成AIは、活用の仕方さえ誤らなければ、仕事の効率化に結びつくともいわれているため、全面的に否定するつもりはありませんが、適切な活用の仕方やルールの制定が追いつかないまま、技術がどんどん進んでいく状況には、些か不安を覚えます。便利さや効率の良さと引き替えに、失ってしまうものも多いのではないかと思います。

私自身、できるだけ無駄は省いて、効率のいい方法を選びたいと考える人間です。ただ、その一方で、効率のよさだけを基準に切り捨ててはいけないものもたくさんあると考えています。たとえば、人と直接会って話し合うこと、体を動かすこと、何かを触ったり観察したりすること、楽器を弾いたり、絵を描いたりすること、何かを覚えたり、計算したりすること、本を読んだり、文章を考えたりすることなどです。こうして挙げてみると、子どもたちが学校現場で経験することが多いですね。このように、どれほど技術が進んだとしても、人間が苦労して経験を重ねることが大切であることは、今後も変わらないと私は考えます。とくに、他者への想像力は、自分自身が苦労して経験をすることによって初めて得られるものなのではないかと思います。立場を超えて協力するためには、他者の置かれた状況を想像し、自分たちとの立場の違いを理解したり、認めたりする必要があります。さまざまなスキルやリーダーシップももちろんですが、想像力こそが「将来の予測が困難な社会」を生き抜くため最も必要なことなのではないかと私は思っています。

ところで、昨年九月二五日に出された中央教育審議会の諮問は「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について」というものでしたが、国としては、急速な少子化への対応として、大学の統合・再編は避けられないものと考えているようです。今後、全国の大学の統合・再編への動きが進みそうです。わが愛媛大学、そして教育学部も、こうした世の流れに対応せざるを得ない状況になっています。

先行き不透明な時代ではありますが、私たち教育学部も、地域における魅力ある教員養成機関として今後も必要とされるよう、教職員一同、力を合わせて頑張ろうと思います。同窓会の皆様には、引き続きご理解とご協力を賜れば幸いです。

目次

表紙
元愛大教育学部教授……菊川　國夫
「経験と想像力」……(1)
愛媛大学教育学部長　小助川元太
心　響……(2)
「多少の縁」　竹上　正也
研究室紹介……(3)
特別支援教育研究室　樫木　暢子
職場だより……(5)
・一歩ずつ
四国中央市・長津小教諭　生田　真希
・教員生活を振り返って
西条市・田野小教諭　山本　蒼太
・子どもたちといっしょに
今治市・富田小教諭　首藤　晋作
・教師になって
砥部町・宮内小教諭　濱田　優菜
・これからも前向きに
久万高原町・久万中教諭　小田　尚美
・出会いに感謝して
鬼北町・泉小教諭　福鹿　巴音
学部トピックス……(11)
・愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が二つのコンクールで全国大会出場を果たしました
・放送大学入学生募集のお知らせ
・愛媛大学大学祭

多少の縁

同窓会理事
竹上　正也
（昭六一卒）

私が小学校に入学した昭和四十四年。東京オリンピックを終え、国民総生産が世界第二位となった日本は、高度経済成長期の真っ只中にあった。大阪万博には、半年間で約六、五〇〇万人が来場し、甲子園では、延長十八回引き分け再試合の激闘を制し、松山商業が優勝した。アポロ十一号のアームストロング船長が月面に偉大な一歩を残し、「男はつらいよ」第一作に寅さんが登場した。子どもが好きなものは、「巨人・大鵬・卵焼き」。四国の片田舎で生まれ育った私は、卵焼きは食べたことがあっても、巨人も大鵬もブラウン管の中でしか見たことがなかった。今のようにゲームが無い時代、学校での話題の大半はテレビ番組。子どもに見せたくない番組の筆頭に挙げられていた「八時だよ全員集合」が始まったのもこの年だった。

小学校六年生の頃、『寺内貫太郎一家』の放送が始まった。笑いあり、涙ありの名作だった。茶の間での食事風景とお決まりの派手な親子喧嘩、悠木千帆（後の樹木希林）扮するばあちゃんが沢田研二のポスターを眺めて、「ジュリーィ～～」と身悶えする姿、今でも目に浮かぶ名物シーンがたくさんあった。水曜日の夜九時からの放送だったが、愛すべき頑固おやじが主人公のペーソス漂う人情ドラマを毎週欠かさず観ていた。

その脚本を書いた向田邦子さんの随筆が、中学校の国語の教科書に採用されている。愛情あふれる父親の姿を描いた『字のないはがき』という題名のその作品は、『眠る盃』という随筆集に収められている。「荒城の月」の一節「めぐる盃」を「眠る盃」と覚えたことにまつわる短い話である。酒飲みの父が酒宴の後眠る姿と盃の中でゆったりと気だるく揺れるお酒の記憶とが相まって、自分には酒も盃も眠っているイメージがしっくりくるという内容である。

何かを間違って覚えてしまうことはよくある。「袖振り合うも、たしょうの縁」、この「たしょう」が「他生」であることを知ったのは、恥ずかしながら教員になってからである。それまで、「多少」だと思い、ちょっとしたつながりも大切にしなさいというくらいの意味だと思い込んでいた。しかし、どんな出会いも単なる偶然ではなく、この世に生まれる以前からの深い縁によって生じるものなのであるから、大切にしなければならないという本来の意味知ってからは、それまで以上に縁を大切にするようになった。

先輩から、同窓会理事の依頼を受けた時、真面目な大学生ではなかったが、これも他生の縁だと思い引き受けることにした。

その縁で、初めてホームカミングデーに参加した。教育学部同窓生の合田みゆきさんの司会で始まった式典では、仁科弘重学長が、デジタル人材の育成、リカレント教育プログラム、学内の組織整備など、愛媛大学が目指している方向について熱く語られた。その後、後藤理恵教授と清水園子准教授による特別講演があった。南予水産研究センターの活動についての報告であった。レジデント型による地域活性化、文理融合型の新しい水産学など、今まで知らなかった大学の姿を垣間見ることができた。一番驚いたのは、卒業生の三六％が愛媛で就職し、しかも、研究センターがある宇和島に残る学生が多いことであった。大学と地域、そして学生との縁の不思議を感じた。その後、チアリーディング部のパフォーマンス、ダンディーズによるミニコンサート、学生の合唱団も参加しての学歌斉唱など、とても充実した式典であった。夕方からの懇親会にも参加した。様々な年代の方々と交流し、楽しい話を聞かせていただいた。新たな縁を結ぶこともできた。来年のホームカミングデーではどんな縁ができるかと今から楽しみにしている。

この八月には、久しぶりとなる教育学部同窓会を計画しています。皆様、同回生やサークルの仲間を誘って、ぜひご参加ください。酒酌みあうも多少の縁ということで。

教育学部生の思い……⑬
・「学びと成長の大学生活を振り返って」
中等教育コース　小野寺弘倫
・「コロナ禍が教えてくれたこと」
小学校サブコース　鶴原　紗恵
表紙のことば……⑭
ホームカミングデー……⑮
特別講演会……⑰
先輩を偲ぶ……⑲
「あしあと⑽」先輩たちのあしあと
同窓会事務局
会員の声……㉑
・「名聲超十方」……吉原　宏文
・「フィンランド」……井手窪　理
俳　句……㉕
句集『正面』より……島津　教恵
部活動紹介……㉖
愛媛大学弓道部
教育学部同窓会からのお知らせ…㉗
会報送付停止等について……㉗
敬弔・寄付者名……㉘
裏表紙……㉙
会員写真館

研究室紹介

愛媛大学大学院教育学研究科 特別支援教育研究室

教授　樫木　暢子　先生

「おもしろい」の種を蒔く

「小学校の先生になりたい」が……

私が小学校二年生の時の将来の夢は小学校の先生でしたが、縁あって肢体不自由（運動機能の障害）の特別支援学校に採用されました。

最初に出会った小三の女の子は、生まれつき手指の数が少なくて、言葉は出ませんが、私が人差し指を出すと彼女も人差し指でちょんと触ってきて（ETみたいな挨拶）、心が通じる感覚を教えてくれました。小柄ながら、人差し指にテープで留めたスプーンでご飯をもりもり食べる姿から目が離せなくなりました。

当時から肢体不自由特別支援学校は肢体不自由と知的障がいが重複していて、重度な児童生徒が多く、分からないことばかりでした。先輩の真似をしたり、研修を受けたりすることで、重症児教育のおもしろさにはまってしまいました。

次に赴任した特別支援学校では、教育相談、進路指導、医療的ケア実施体制の整備などに取り組みました。一番おもしろかったのは、言葉を発しない子どもたちとのコミュニケーションと成長発達です。東北大学の川住隆一先生は「子どもの微小運動にその意味（たとえばどのような意思の現れなのか）がよくわからないことが多い。しかしそれでもその意義を大胆に解釈しとりあえずの対応を行うことが求められる。最も避けるべきことは、意味のない動きとして無視ないしは切り捨てすることである。」（川住隆一、二〇〇九）と言われています。「大胆な解釈」の下、話し掛け続けることで思ってもいない変化を見せることがあるというのです。

高等部卒業までの二年間を担当させていただいたMさんは言葉を発することはありませんでしたが、私たちはMさんがおもしろいだろうことを考え、Mさんはきっとこう言うだろうということばをいつも探していました。次第に嬉しい、楽しい、困っている、真剣に考えている、誇らしげ、など、たくさんの表情がわかってきました。Mさんは笑顔が素敵なお姉さんになって卒業していきました。どんなに障がいが重くても、花を咲かせて高等部を卒業していくことを知りました。

訪問教育と卒後の生活づくり

訪問教育は家庭や病院、施設などに先生が教育を届けるシステムです。全国的に週三回、一回二時間と制約の多い制度ではありますが、子どものペースで、じっくり学習に取り組むことができ、重症児の成長発達を支えています。一方で、友だちに会えないこと、授業時数が少ないこと等から、通学か訪問かを悩まれる保護者が多いのも事実です。障がいが進行して、人工呼吸器を使うことになったYさんは地域の小学校から特別支援学校中学部に入学しました。保護者の付添が難しかったことから訪問籍になり、友だちに会えない日々に、「普通の学校に行きたかった」と後悔したそうです。高等部で担任になった私の仕事は、「普通の学生みたいな生活がしたい」というYさんの願いを叶えることになりました。通学籍の友だちとメール交換できるようにしたり、スクーリング時の医療的ケアの体制を整えて在校中の保護者の付き添いを無くしたり、学校祭に運動会、漢字検定、宿泊、「おもしろい」を叶える取り組みを考え続けました。その頃の私たちの合言葉は「次は何をしようか」でした。

交流会

訪問生は卒業後の日中活動も大きな課題です。Yさんは「卒業したらずっと家にいると思っていた」そうですが、先輩の進学を機に、学び続けることを選びました。卒業後は通信教育でイラストを学び、フリーのイラストレーターとして仕事を受けながら、一人暮らしを実現しました。友だちと会えることが願いを叶える原動力になったことは間違いありません。

こうした教員経験を基に、障がいや病気の重い子どもたちの教育、自立に向けた支援などが主な研究テーマです。ゼミ生には、障がいや病気のある人たちについて、興味のあること、自分がおもしろいと思えることをテーマにするように話しています。

医療的ケアがあっても

医療的ケアがあり、保護者の付き添いが難しい場合は訪問籍という時代が長く続きましたが、この

十数年で、医療的ケアをめぐる状況は大きく変わりました。学校看護師（看護職員）や研修を受けた認定教員による医療的ケアの実施が可能になり、多くの子どもたちが保護者の付き添いなしで通学できるようになりました。

愛媛県でも平成二十六年度から医療的ケアの教員実施が進められ、経管栄養や口腔内・鼻腔内などの吸引ができるようになりました。ここ数年は特別支援教育コースの先生方と、県の教員向け研修を開催しています。

また、愛媛県では人工呼吸器をつけていても通学したい、医療的ケアを学校で実施してほしいという子どもたちと保護者の願いに応え、高度な医療的ケア（人工呼吸器や酸素吸入、インシュリン注射など）について、看護職員が対応できるようになりました。医療的ケアがあっても学校に通って学ぶ楽しさを実感できるようになり、「おもしろい」が広がっています。

病気療養中でも

赴任当初から、学生ボランティアによる病気の子どもたちの学習支援を進めてきました。ここ数年は、医学部や地域のＮＰＯと協働で、病気の子どもたちの自立支援にも力を入れています。入院や在宅療養で通学できなくても、子どもたちは学びへの願いをもっています。院内学級などの制度はあるのですが、一部の病院のみで、特に高校段階の院内学級はなく、どこにいても学べる状況とは言い難いのが現状です。

病室での学習支援

コロナ禍で休校になった時、学校再開を待ち望む子どもたちから「友だちに会いたい」「友だちと遊びたい」という声がたくさんありました。学校は知識を得るためだけの場ではなく、得た知識を「わかる」ために話し合ったり、試したりする場です。また、人とつながることで生きていく生活の場、それが子どもたちにとっては「学校」だと思います。

訪問カレッジ・オープンカレッジ@愛媛大学

障がいの重い方たちの生涯学習にも取り組んでいます。訪問カレッジはご自宅や入所施設、病院などを訪問して個別の学習をします。久しぶりにギターと教材を担いで出掛け、皆さんの笑顔に出会うことができました。まだまだ、青年期・成人期の学びとは何か、探り切れていないこともありますが、「おもしろいことをしよう」と約束しています。

最初に出会った子どもたちは既に四十代です。成人した彼らがケアされるだけでなく、それぞれの地域で仲間とつながりながら、学校でつけた「おもしろい」を叶える力を発揮していってほしいと願っています。また、学びたい人には生涯を通じて学べる仕組みをつくっていきたいですし、この子たち、この人たちがいることで豊かな気持ちになれる、そんな地域を愛媛で出会った人たちとつくり続けていきたいです。

訪問カレッジ・オープンカレッジ
@愛媛大学リーフレット抜粋

特別支援教育からインクルーシブ教育へ

現在、障がいはＩＣＦ（国際生活機能分類）で定義されています。何かの要因で生活動作や移動などができないことにより、社会参加ができにくい状態が「障がい」とされています。手立て（環境要因）を調整すると、社会参加の状態は変わってきます。どんな環境要因を希望するかは本人の考えや状況（個人要因）によります。つまり、障がいは、社会と個人の関連で規定されるということです。教育を受けるときに変更・調整などが必要な状態を「特別な教育的ニーズ」があると言います。特別支援教育は「障がい」を対象とした教育ではなく、個々の「特別な教育的ニーズ」に対して支援をすることで、その子が学びの主体者になることを目指す教育です。学びにくさや人との関わりにくさという「特別な教育的ニーズ」に対して、どんな手立てがあれば学びやすくなるかを考えます。誰にでも得意不得意があります。得意を活かしながら学べたら、楽しく学べて、学習が進みます。得意不得意があるから、教えたり、教えられたりします。そこから対話が生まれ、深い学びにつながります。

今、日本はインクルーシブ教育を目指しています。障がいの有無にかかわらず、生まれ育った地域で、自分に合った学び方で仲間と一緒に学ぶことができるシステムです。

どこの学校でも、どこの学級でも、障がいがあってもなくても、何歳になっても、人とのかかわりの中で学び続けられるよう、一緒に「おもしろい」の種を蒔きませんか？

職場だより

一歩ずつ

四国中央市
長津小教諭
生田　真希
（令五卒）

私は、小学六年生の担任だった先生に憧れを持ったときから、教師になるという夢が揺らぐことはありませんでした。高校での猛勉強の末、愛媛大学教育学部小学校サブコースへ進学しました。大学では、同じ夢を持つ友達と出会い、心身共に充実した四年間を過ごしました。三回生の時の教育実習では二年生、四回生の応用実習では三年生のクラスに入り、子どもたちとコミュニケーションを取る楽しさを感じたり、緊張しながら授業をしたりと、子どもたちに助けられながら、最後までやりきることができました。どちらの教育実習でも、すばらしい実習担当の先生と出会い、たくさんの励ましをいただきました。四回生になる前の春休み頃から、教員採用試験に本腰を入れ、一日一日を大切に勉強に励みました。「無理をせず、焦らず、自分にできることをしていこう」と決めていたので、大きな不安や焦燥感に駆られることなく心穏やかに勉強ができました。しかし、面接練習はそうはいかず、酷い不安や緊張感が襲い掛かりました。気持ちが採用試験に向かず、休んだときもありました。それでも、一緒に教師を目指す友達と互いに励まし合い、当日は筆記試験、面接、小論文全てにおいて自分の力が発揮できたと思います。この時の友達の存在は凄く大きく、今でも会ったときはその話をしたりもします。

愛媛大学を卒業後、新規採用教員として四国中央市立長津小学校で勤務することになりました。配属先決定の通知を見たときは、松山市から一番遠い場所だったこともあり、不安が大きかったです。三月末に長津小学校へ挨拶に向かい、校舎案内や働き方などを先輩に教えていただきました。「この学校で教員生活をスタートするのだ」と期待感もありながら、凄く緊張していたのを今でもはっきりと覚えています。

四月初め、最初の職員会議で四年生の担任と発表されました。四年生の時の自分を思い出しながら、子どもたちに出会う準備を始めました。まずは教室整備です。机と椅子、ロッカーや靴箱などに名前を貼ったり、教科書を移動させたりと、やることがいっぱいです。また、新学期当日の自己紹介や、授業開きの仕方、週案の作成など初めてのことばかりであたふたしていました。瞬く間に学校生活が始まりましたが、教師という仕事は思ったよりも悩み事の連続でした。

まず一つ目は学級経営です。私のクラスは比較的人数が少なく二十人の学級です。しかし、一人一人の学習理解度や心の成長度合いは違います。全体的な指示や指導では、伝わらないことがあります。その子どもに合った指導の仕方や伝え方、関わり方なども違うので、「どうして伝わらないんだろう」と悩みました。二つ目は、授業です。初任者なので、専科の先生や教頭先生に、複数の教科を受け持っていただいています。自分の受け持つ授業に責任を持ち、日々奮闘していますが、今のところ「うまくいった」と自信を持って思える授業はできていません。一つ一つの発問や活動に、意図や目的を持たせることが大切だと教わりました。その発問や活動で、何を考え、何を身に付けてほしいのか、毎時間考えるとなれば追いつかなくなるときがあります。力不足を自覚し、本を読んだり、先輩教員の授業参観を積極的にお願いし、見に行かせていただいたりすることで技や工夫をまずはまねすることを心掛けています。いつか一回でも、「うまくいった」と思える授業ができるように、一時間一時間無駄にすることなく、コツコツと授業経験を積み上げていきたいです。三つ目は、生徒指導です。トラブルが起きたとき、うまく伝わらない、うまく言えないときが何度もあり、本当に心が折れそうになります。子どもにもそれぞれ行動への背景があって、伝えたい思いがあります。そこを丁寧に汲み取り、相手の立場に立つことを心掛けてはいますが、なかなかうまくいきません。

思い描いていた教師にはなれていませんし、悩みばかり書き連ねてしまいましたが、子どものふとした成長や、優しい行動、頑張っている姿を見ると、「教師ってやっぱりいいなあ」と心の底から思います。最近で一番うれしかったのは、一学期は手を焼いていたクラスの子どもが、「おれの味方には先生がおるけんなあ」とボソッと呟いたことです。日々積み上げてきた信頼関係が、子どもの言葉になって表れた瞬間でした。悩みながらも成長していく姿を間近で支えていける、こんな職業は他にないと思います。日々の悩みが吹き飛ぶくらい、子どものふとした言葉や感謝の言葉にはたくさんのエネルギーを貰えます。

そして、私が元気に一年目を過ごしているのは、子どもの成長だけでなく、校長先生や教頭先生を始め、心強い学年主任と、周りで何でも助けてくださる優しくて強い先生方がいるおかげです。長津小の雰囲気は最初から温かく、職員室に帰ると安心感があります。放課後は談笑で盛り上がることもあります。四月当初は、「最初は誰でも分からないから大丈夫だよ」と優しい声掛けをたくさんいただきました。先生方も忙しい中、時間を割いてくれています。半年以上たった今でも心掛けているのは、分からないことをそのままにせず、「ここが分からないので教えてください」と自分から積極的に助けを求めるようにすることです。分からないことを自分の判断だけで決めるのではなく事前に相談すること、事後はお礼と報告を怠らないようにすることを大切にしています。また、人として誠実であることも大事だと思います。教師は子どもの鏡です。自分が正しい行動をする、やるべきことはきちんと終わらせるなど、子どもにそのようなことを伝えるのであれば、自分自身もそうでないといけません。それと同時に、ありのままの自分でいることも大事だと考えています。私は、子どもの前でもよく失敗します。しかし、失敗する自分がいることを受け入れているので、子どもが失敗しても、余裕を持って接することができます。もちろん失敗をなくすことが一番ですが、「失敗したとしても、次どうすれば良いのか」を考えることが成長に繋がるのだと、自身の経験から子どもに伝えていけたら良いと思います。

教師になってから、家族や友達、同僚の先生方、子どもたちなど色々な人に助けてもらってばかりです。一人じゃ生きてはいけないことを痛感しています。だからこそ、子どもたちにとってもそんな存在でありたいと思います。教師対子どもと考えるのではなく、人対人として子どもたちと日々向き合っていきたいです。まだまだ未熟ですが、人としても教師としてもさらに成長していけるよう、一歩一歩踏みしめて頑張っていきます。

教員生活を振り返って

西条市
田野小教諭
山本　蒼太
（令二卒）

愛媛大学を卒業し、今年で四年目になりました。教員になる前、教員になってからも様々な先生方にお世話になりました。教員採用試験を受験する直前まで「教師として働きたい」という気持ちはあったものの、教員採用試験一週間前まで高校実習に参加するほど、どの校種の採用試験を受験するか迷いに迷っていました。

私が高校実習でお世話になった母校の三崎高校は、地域おこしに力を入れており、地域と一緒に商品開発をしたり、イベントを企画したりするなど、様々な活動をしていました。私が高校に入学する際には、入学希望者が少なく、あと一人で分校化の危機と言われていました。しかし、地域学習が始まり、全国からの入学者も募集し始めると、だんだんと入学者が増えだし、分校化も白紙に戻すことができました。そんな学校で働いていた高校の先生方は、地域の方や保護者、先生同士が「子どもたちのため」に協力しながら働いていました。自分もそんな場所で働きたいと思うと共に、小学生の段階から自分の地域のことを知り、地元を大切にする子を増やしたいなという思いが強くなりました。そして、悩みに悩んだ末に一番地域と関わる機会が多い小学校で教員をしようと考え、小学校教員を目指しました。

無事に（なんとか）教員採用試験に合格し、西条市立玉津小学校に赴任することが決定しました。その時には「東予はどんな場所なのだろうか」という気持ちと「自分が育ってきた同級生十二人の小規模校とは違い、数百人も児童のいる学校では大人数のクラスはどのように子どもたちを見るのだろうか」「どうやってみんなで一緒に勉強するのだろうか」という不安な気持ちでいっぱいでした。そんな中、初任者指導の先生と学年主任のお二方には特に熱心に学校のことや教員のことを教えていただき、今でも教員としての根幹を作ってくださったことに感謝しています。

初任者指導の先生には、毎週の授業を見ていただき、指導の声掛けの仕方から板書の際のチョークの持ち方まで、毎回丁寧に事後指導をしていただきました。毎回、授業を見ていただいた後には、よかった点と改善点などをデータでいただいていました。今でも子どもとの接し方や迷ったことがあった際には、そのデータを見返して問題を解決することもあり、とても大切な宝物になりました。学年主任には教員として大切な思いについて教えていただきました。当時、国語や算数の授業をする際には、毎回の授業に指導案やワークシートを作って授業に臨んでいました。しかし、子どもたちの発想や感覚はそれぞれで、一人ひとり違った反応をします。そのため、自分の思い描いた授業ができず悩むことも多くありました。今思い返せば、「教えないといけない」という気持ちが強くなりすぎ、子どもたちをしっかりと見ることができていなかったのだと思います。そんな時、学年主任は「いつでも授業を見に来ていいよ」とおっしゃってくださり、何度も授業の見学をさせていただきました。特に印象に残っているのは、算数の授業を見せていただいた時です。子どもたちの反応に応じて臨機応変に授業を組み立てつつも、授業で大切な部分はしっかりと抑える姿を見て、子どもたちと一緒に学んでいくという姿勢の大切さを学びました。

教員生活二年目は、一年生の担任になりました。一時期、高校教員を目指していた自分が小学校一年生の担任をするとは夢にも思っておらず、とても驚きました。小学校一年生は、ひらがなや数の数え方を覚えるなど、小学校で学習する初歩、いわば、学校の「当たり前」を教えます。自分たちが当たり前に思っていることでも、一年生から見ると初めてのことばかりで、数字や文字を0から教えること、学校生活の基礎基本を教えることがここまで難しいのかと痛感しました。また、「教えること」と「子どもの自主性」のバランスの難しさを感じました。私が担任をしている児童に、「自分の描きたいように絵を描いていいよ」と声掛けをしても、なかなか描くことができない子がいました。その子に対してどこまでのサポートをすると、この子の自主性を生かしながら絵を描くことができるのか、とても悩みました。その時は、一緒に絵を描いたり、工作をしたりしましたが、正解ではないと思います。「教員自身も学び続けることが大切だ」と改めて感じました。

けれど、一年生が成長するスピードがとても速く、どの学年よりも成長を実感できる学年でした。また、小学校一年生の担任の先生がここまで教えてくれて、二年生以上の学年に繋がっていることが分かり、改めて一年生担任のありがたさを感じました。最初は、本当に自分が一年生の担任で大丈夫かなという不安が大きく、途中で悩むことも多く、教員を辞めて本気で転職も考えた一年間でした。けれど、修了式で子どもたちの成長した姿を見た時、「またいつか一年生の担任を経験したいな」と同時に「この子たちの成長する姿を見られるよう、教員を続けよう」と思うことができました。子どもたちに教えてもらい、助けられた一年でした。

教員生活三年目では、昨年担任をしていた学年を持ち上がり、二年生の担任となりました。クラスが変わったものの、昨年も担任をしていた子たちともう一年過ごすことができました。この年、私はたくさんの経験をさせていただきました。その中でも、校内音楽学習発表会はとても思い出に残っています。同じ学年の先生たちや保護者の方、学校ボランティアの方々と協力して「ライオンキング」の合奏やダンスを計画しました。入学したての時には鍵盤ハーモニカのドレミも分からず、一年生が終わる頃にやっとドレミを弾けるようになった子たちが、鉄琴や木琴、オルガンやシンセサイザー、パーカッションなど、様々な楽器にもチャレンジしました。ボランティアの方々にも協力していただき、衣装や小道具まで揃えて本物のライオンキングの舞台顔負けの発表ができました。また、ボランティアの方の中には、教員を退職された先生や音楽が好きなボランティアの方もおり、普段ではできない程の手厚い支援をしていただきました。自分も、楽器の指導をしつつ指揮者として子どもたちの姿を見ることができ、みんなで作り上げることができた本当に素晴らしい学習発表会でした。

そして教員四年目。初めての異動でドキドキしながら西条市立田野小学校に赴任しました。今の学校は地元の学校と似ていて、全校児童と教職員を合わせても百人に満たない小規模校です。大規模校に比べて人数が限られ、子どもも教員も一人一人の役割が大きく、大規模校とは違った大変さがあります。しかし、運動会では保護者の方や地域の方と一緒になって「地域の運動会」をしたり、交通安全教室には二十人以上の地域の方が来てくださったりするなど、地域全体で子どもを育てる風土が田野にはあります。玉津ではコロナ禍のため地域との関わりが少なかった分、この田野で「田野が大好きだ」と思える子を増やせるよう、保護者の方や地域の方と協力していきたいと思います。

子どもたちといっしょに

今治市
富田小教諭
首藤　晋作
（令四卒）

私は、高校時代に地元である今治市の高校で甲子園出場を目指し、野球に打ち込んでいました。そこで、どんなときでも一切の妥協を許さず、自分たちを全力で育ててくれた監督さんとの出会いがありました。そんな監督さんと出会い自分も誰かの夢を支えられる人になりたいと思い、教員への道を選びました。

自分たちが最高学年になったチームでは、秋の県大会では、打球が自分の横を抜けていき二回戦でサヨナラ負けを喫しました。夏の大会では、出番なく二回戦で敗退しました。このとき、監督さんから「負けから(挫折から)始まる」という言葉をいただきました。夏の大会で出番なく終わったまま野球を諦めたくないという思いや愛媛の教員になりたいという思いから地元である愛媛大学に入学し、硬式野球部で全国大会を目指したいという気持ちをもち、入部しました。

愛媛大学野球部は、高校の時代の環境と比べるととても良い環境だったとは言い難いものでした。しかし、先輩方は、環境を言い訳にせず、練習を工夫し、限られた練習の中で、試合に勝つために必要なことは何かを常に考えて練習をしていました。高校時代すばらしい環境の下で甲子園出場を目指し、練習できたことは当たり前ではないことを改めて感じました。

熱心に練習に打ち込んだ令和二年に新型コロナウイルスが猛威を振るいました。四国六大学野球令和三年度春季リーグでは四国学院大学と二試合した後、愛媛大学付属病院を有していることなどから、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、残り試合を辞退することになりました。よって、道半ばであきらめなくてはいけなくなりましたが、「負けから始まる」という監督さんの言葉のおかげで教員採用試験の勉強へ切り替えることができました。なんとか令和四年度から小学校教員採用が決まり、監督さんに報告するため高校のグラウンドへ行きました。監督さんからは「大変な仕事だぞ。自分のために働いても意味がない。子どものために働きなさい」という言葉をいただきました。高校を卒業してからも、成人の年や就職先が決まり卒業する年に監督さんの家に呼んでいただき、自分たちの様子を気にかけてくださいました。自分たちのことをいつまでも気にかけてくれる監督さんだからこそ「子どもたちのために働きなさい」という言葉に説得力がありました。

初任者として配属された令和四年四月から新しいことの連続でした。分からないことがたくさんあり、浮足立っていても、毎日子どもたちは、笑顔で「せんせい～」と呼んでくれることに戸惑いがありました。しかし、附属小学校へ教育実習にいったときに、「若い間は、ケイドロで学級経営をするといいよ」と担当の先生に教えていただきました。すぐに子どもたちが楽しいと思える授業はできないけれど、外で子どもたちと遊ぶことはできると思い、昼休みには外で遊ぶように心がけました。すると、子どもと遊びを通じて信頼関係が築けるようになりました。授業ではあまり頑張ることができなかった子どもも、遊びの中から良いところを見付けて褒めてあげると、授業でいつもより集中して取り組んでいました。このことを忘れずに、子どもたちのことも考えて日々取り組んでいきたいと思います。

初任者教員の六月から、教員ソフトボールチーム「愛媛ENDLESS」に入りました。主に東予地区の小学校・中学校の先生が所属しています。「愛媛ENDLESS」は、「ソフトボールを通して人間性を磨き、社会人としての資質・能力を高めていく。そして、ソフトボールで築いたつながりを生かして互いに指導力を高め合い、愛媛県の子どもたちの健全な成長に尽力する組織となる」ことを目指して、活動しています。

令和五年七月に全日本教員選手権ソフトボール大会が行われました。どの先生も勝つために自分ができることを考えて一生懸命プレーをしている姿がとても勉強になりました。教員になっても本気で挑戦できるものがあり、すばらしいなと思いました。教員として子どもたちを支える立場になったが、本気で挑戦できる環境があり、そこでの経験は教員として必要な資質を培っていけると感じました。また、色々な先生の話を聞けたり、何かあったときに相談したりできる先輩教員といっしょにプレーできるのはすごくありがたいことです。

ＰＴＡソフトボールにも参加しました。保護者の方々とソフトボールを通して、関係づくりができました。子どもの家での様子など、人生の先輩として、ソフトボール以外のことまでたくさんのことを教えていただきました。また、ソフトボールチームに入っている保護者の子どもと学校ですれ違ったときに、「昨日、お父さんといっしょにソフトボールしたんやね」「先生昨日ノーヒットやったんやね」など声を掛けてくれました。新たに子どもと関係をもつきっかけにもなりました。

今年の三月に滋賀県の琵琶湖を自転車で一周しました。琵琶湖の一周は、二〇〇kmです。今治から尾道まで自転車で渡ったことはありましたが、今治～尾道の距離よりも長く、強風や雨が降ったこともあってかなりハードでしたが、一周したときに今まで味わったことのない達成感がありました。子どもたちに話をするととても興味をもってくれて今度しまなみ海道にサイクリングに行くことになったことなど話すきっかけになりました。来年は、愛媛マラソンに出場しようと思っています。課外活動（駅伝）の指導も十一月から始まります。実際に、教師に競技経験があり、子どもの目標になることで子どもへの指導がより説得力のある言葉になります。駅伝大会や校内持久走大会に向けて、子どもたちといっしょに切磋琢磨しながら体力向上を目指し、指導に当たりたいと思います。これからも、体を動かして子どもたちと関わっていきたいと思います。

教師になって

砥部町
宮内小教諭
濱田　優菜
（令五卒）

私が小学校の先生になりたいと思うようになったのは、小学校六年生の時です。そのときの担任の先生は、教育への情熱と子どもへの深い愛情をもった温かい先生でした。その先生と出会って、子どもたちが「この先生は自分のことを大切にしてくれている」と自信をもって言えるような、温かさをもった先生に私もなりたいと思うようになりました。これまで私を育ててくれた愛媛県で教員になろうと思い、地域と関わりながら学ぶことのできる愛媛大学教育学部への進学を決めました。志望理由書を書く時期になり、うまく考えを言葉にすることができない私のために、目標としている先生がお忙しい中、相談にのってくださいました。およそ六年ぶりにお会いしたにも関わらず、当時の思い出を笑顔で話してくださり、とてもうれしかったのを覚えています。その先生の変わらない温かさを感じ、自分の理想とする教師像をはっきりとさせることができました。

愛媛大学での学びで特に心に残っているのは、愛媛大学附属小学校での教育実習です。分かりやすい授業を行う難しさや子どもとの関わり方に悩むときも多くありましたが、子どもたちの見せてくれる笑顔が、早く教師になりたいという思いを強くしました。教員採用試験に向けた勉強を始めてからも、不安で押しつぶされそうなときには、子どもたちが言ってくれた、「濱田先生、絶対先生なってよ」という言葉を思い出しました。

その後、砥部町立宮内小学校での勤務が決まり、三年生の担任をさせていただくことになりました。自分の学級の子どもたちはどのような子たちなのだろうかという期待と、子どもたちにとってよい教師になれるだろうかという不安を抱えて春休みを過ごしました。そして四月、元気いっぱいの子どもたちと出会い、三年一組での生活がスタートしました。友達と楽しく遊ぶ様子に元気をもらったり、何事にも全力で取り組む姿勢に感動したりしています。その中でも特にうれしいのは、子どもたちの「できた」の顔を見られたときです。難しい算数の問題が解けたとき、図工の作品が完成したとき、体育で今までできなかった技ができるようになったときなど、これまでたくさんの「できた」の顔を見ることができました。その顔を見ると、教師になってよかったと改めて実感することができました。しかし、うまくいかないことも多くあります。面白い授業ができない、児童同士のトラブルがよく起きる、効率よく働くことができないなど、悩みを数え始めるときりがありません。そんなとき、不安でいっぱいの私をいつも助けてくださるのは、宮内小学校の先生方です。困っていればすぐに助けてくださり、大丈夫だよと、励ましてくださいました。そして、お忙しい中、とても丁寧に指導してくださいます。また、先生方は私の学級の前を通る時に、よく声を掛けてくださいます。そのおかげで、私も安心して授業をすることができています。いつも温かく見守ってくださる先輩方には感謝の気持ちでいっぱいです。

教師になってからの日々は、あっという間の毎日でした。気が付けば、もうすぐ二学期が終わろうとしています。一学期に最も思い出に残っているのは、初めての研究授業です。道徳で、「自分に正直に」という主題の授業を行いました。私の緊張がうつり、子どもたちもとても緊張している様子でしたが、自分の考えをしっかりとノートに書き、友達と助け合いながら話合いをしました。また、集中して話を聞こうとしてくれて、本当に心強かったです。やっと少しは納得できる授業を行うことができたように思います。授業が終わった後、「先生が緊張したよ」と声を掛けてくれた子どもがいて、一緒に笑い合ったのもいい思い出です。

二学期には、運動会がありました。何日も前から他の先生方と話し合い、指導や進行の計画を立てました。教師になってから、これまで先生方は、こんなに時間をかけて準備をしてくださっていたのかと、自分が子どもだった時には気が付かなかった発見や驚きがたくさんあります。三年生は、かけっこや団体競技など、様々な種目がありましたが、その中でも思い出に残っているのは表現です。子どもたちと一緒に振り付けを考えたり、休み時間にも集まって練習をしたりしました。ダンスの指導をさせていただいたときには、練習を重ねるごとに上達していく子どもたちの姿に感動したのを覚えています。そして当日は、今までで一番の演技を見せてくれました。練習でうまくいかないことが多かったウェーブも、心配していた退場のタイミングもばっちりでした。運動会を終えて、教師という仕事のすばらしさを改めて実感しました。

四月に三年一組での生活が始まった日、私は子どもたちに三つのことを伝えました。一つ目は、みんな誰かの大切な人だということを忘れないでほしいということ、二つ目は、失敗が許されるクラスであってほしいということ、三つ目は、笑顔がいっぱいのクラスになってほしいということです。それから約八ヶ月が経ち、子どもたちはたくさんの成長を見せてくれました。私も子どもたちも失敗することはよくありますが、みんなで助け合いながら成長していくことができる、そんなクラスに少しずつなってきているのではないかと思います。三学期はどのような成長を見ることができるのか、今からとても楽しみに思います。

今後の教師としての目標は、二つあります。一つ目は、授業力を向上させることです。子どもたちは正直です。授業が分かりにくい、つまらないときは表情や態度ですぐに分かります。反対に、楽しい授業ができたときには、目を輝かせながら話を聞きます。授業が楽しい、もっと学びたいと感じてもらえるように、反省と挑戦を繰り返しながら成長していきたいと思います。二つ目は、子どもたちの成長を見逃さないようにすることです。これまで、授業を進めることだけで精一杯になってしまったり、休み時間が提出物の確認や丸付けだけで終わってしまったりすることが多くありました。まだまだ失敗ばかりの毎日なので、いきなり完璧にはできませんが、少しずつでも子どもとしっかりと向き合う時間を増やしていけたらと思っています。

教師として成長していくために、これからも学び続けていきたいと思います。

これからも前向きに

久万高原町
久万中教諭
小田　尚美
（平二三卒）

教員になって、十年以上が経過した。新採だった頃は、十年働いている先輩の先生は、何でもできる人ばかりで、私にとって憧れだった。果たして今、自分があのとき憧れていた先生方のようになれているかというと、全くそうではない。今でもたくさんの人に助けられ、支えられ、励まされている。この原稿を書くにあたり、今までの自分の教員生活を振り返ってみたい。

私の教員生活は、新居浜でスタートした。勤務するまで一度も行ったことがない場所だった。でも、私は新居浜で教員生活がスタートできたことを、本当に恵まれていたことだと思う。

一年目は、副担任だった。一学年五クラスの大規模校。学年部の先生方は本当に優しい方ばかりで、朝の会、帰りの会、給食の時間、昼休み、いろいろなクラスの見学をさせていただき、たくさんの先生方の手法を勉強させていただいた。授業もTTや少人数指導だったため、ここでもいろいろな先生の授業の様子を見させていただくことができ、私の授業づくりの土台となっている。

また、運動会や合唱コンクールでの生徒との関わり方も大変勉強になった。あるクラスで、合唱の伴奏者が急遽できなくなり、私が伴奏をすることになった。このとき、練習から参加したことで、担任の先生の生徒への関わり方を間近で勉強することができた。大きな声で怒ることがすべてではないということ。生徒の心に響く話し方が大切だということ。今もなかなかできていないが、私の生徒指導の基礎になっている。

二年目からは学級担任になった。とにかくしっかり、きちんとしなければいけない。当時の私はそう思っていた。今考えると、私が「完璧」なんて無理な話だが、当時は必死だった。生徒の心に響くように話そうと思っても、なめられてはいけないということばかり考えて、生徒を型にはめようとしていた。

そんなある日の放課後、先輩の先生に「今日は隣の教室からコンビニの話が聞こえてきた」と言われた。確かに私は、その日の帰りの会でコンビニの話をした。私は怒られるのだと思った。でも、その先生は「小田先生らしくていいね」と言ってくれた。そう言われた瞬間、「これでいいのか」と思った。そして、生徒の前で自分をつくるのはやめようと思った。生徒の心は、本当にするどい。表面上の言葉を取り繕っても、生徒の心には届かない。普段の何気ない会話で生徒との人間関係を築いていくことの大切さを学んだ瞬間だった。

新居浜でお世話になった先生方や、教え子たちとは、今でもつながりがある。コロナ禍が収束をむかえ、久しぶりに会うことができた。先生方に会うと、新採の頃の記憶がすっとよみがえり、身が引き締まる。また、教え子の中には、教師を目指している人がいる。私は中学生のときの担任の先生に憧れて教師を目指したのだが、教師を目指してくれていることが、本当にうれしい。教え子と同僚として再会したときにガッカリされないように、これからも頑張っていきたい。

現在は、久万高原町で勤務している。久万高原町も、勤務するまで一度も行ったことがない場所だった。冬にはストーブが必須だと聞いて、そんなばかなと思ったが、本当だった。冬になると、エアコンの暖房だけでは教室がいつまでたっても寒いのだ。昨年のクリスマスは全国ニュースになるほどの大雪が降り、初めての雪かきを体験した。あんなに重労働だとは知らなかった。今年は、どうかほどほどに降ってほしい。

勤務している学校は、一学年一クラスの小規模校。一クラスしかないため、今まで「他のクラスのやり方を参考にしよう」「隣のクラスの先生に聞いてみよう」と甘えていた私にとって、全部自分に責任があるという状態は、不安でいっぱいだ。これでいいのかと日々自問自答しながら、学級担任を務める毎日である。

そんな私を励ましてくださっているのが、久万中学校の先生方だ。「それでいいよ」「やってみよう」「私にできることがあればするよ」と、励まし、助けてくださる先生。私のしたいことを応援し、私が失敗をすれば一緒に考え、私が悩んでいれば一緒に解決策を考えてくださる先生。今も、私はとても恵まれた環境で働かせていただいている。

すべての先生がすべての生徒と関わることができるのが、小規模校の良さだと思う。学級の生徒の授業中の様子、部活動での様子、掃除中の様子。あらゆることをすぐに共有でき、生徒の多様な姿を知ることができる。国語は苦手だが、美術の絵はとても上手な生徒。部活動で優しく後輩に声をかける生徒。普段は元気いっぱいにはしゃいでいるのに、掃除となると黙々と隅々まで掃除をする生徒。一人一人の生徒を、自分の思いこみで勝手に「○○な生徒」と決めつけていなかっただろうかと、反省することがいくつもあった。

小中の連携も密だ。研究授業をしたとき、参観に来られた小学校の先生が「あの子があんな発言をするなんて、驚きました。成長している姿が見られて、とても嬉しかったです」と言ってくださった。日々接していると、生徒の成長に気付きにくい。でも、久しぶりに生徒の姿を見た方にこう言われたときは、とてもうれしかった。学級経営でうまくいかないことが多々あるが、焦らず、前向きに頑張っていこうと思った瞬間でもあった。

さて、愛媛大学教育学部を卒業して教員になって十年以上が経過したが、今も愛大での学びが授業で活きる場面が数多くある。私は国語科の教員だが、大学を卒業するときに、「坊っちゃん」の工芸小型本を先生からいただいた。「坊っちゃん」の授業をするときには必ず生徒に見せているが、毎回興味津々で、「これで読みたい」という生徒は多い。大学で教えていただいた古典教材、文学教材の裏話や小話をしても、生徒は目を輝かせる。忙しいことを理由に教材研究を怠りがちだが、少しでも国語が楽しいと思う生徒が増えるように、これからも授業運営を頑張っていきたい。

私が教員として心がけたいと思っていることは、「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく、ふかいことをおもしろく、おもしろいことをまじめに、まじめなことをゆかいに、ゆかいなことをいっそうゆかいに」だ。「むずかしいことをやさしく、やさしいことをふかく」は、特に授業で目指していることだ。かつて私は、とにかく生徒が挙手をして、盛り上がる授業をしようと思っていた。でも、ある先輩の授業で、手が挙がらなくても生徒一人一人がじっくりと考えている姿を見て、衝撃を受けたことがある。易しいことを深く考えさせるためには、研究、準備が不可欠だ。でも、追求していきたい。

そして、「ゆかいなことをいっそうゆかいに」。一人でも愉快なことが、学級で過ごしていると、もっと愉快になる。学級にいると楽しい。そんな温かい学級づくりを目指して、これからも子どもたちと日々前向きに頑張っていきたい。

出会いに感謝して

鬼北町
泉小教諭
福鹿　巴音
（令五卒）

私は、人との出会いに恵まれています。教師を目指したきっかけは、小学校二年生の担任の先生との出会いがあったからです。その先生は、子ども一人ひとりと向き合い、愛のある指導をしてくださいました。また、休み時間には一緒に外に出て遊んでくれて、学級の仲も深まったように思います。中学、高校では吹奏楽部に所属し、技術だけでなく人間力まで高めてくださった先生方や切磋琢磨しながら厳しい練習も乗り越えてきた仲間との出会いがありました。そんな素敵な人との出会いから、人と関わる仕事に就きたいと思うようになりました。そして、これまでに出会った憧れの先生方のように、子どもが学校に来たい、学校が楽しいと思えるような学級を作り、子どもと心から寄り添える教員になりたいと思い、愛媛大学教育学部に入学しました。

大学での四年間で、教育現場に出ることを想定して、大学の講義で学んだ理論を教育現場で実践し、学んだことを確実に自分のものにすることを目標にしていました。一回生の頃から地域連携実習に参加し、松山市の小学校で学習支援を行いました。多様な子どもたちと関わりながら、その子どもに適した支援を模索しました。支援をしながら授業も見させていただきました。講義で学んだことと結び付けながら、授業の流れや発問の仕方、教師の声掛け等を観察し、ノートにまとめていきました。指導の引き出しを増やすことが出来たように思います。二回生になると、母校で実習を行う「ふるさと実習」が予定されていました。そのため、それまでに吸収できることは全て吸収し、充実した実習にしようと考えていました。その矢先に、新型コロナウイルスが流行し、小学校はもちろん、大学にも通うことが出来なくなりました。予定されていたふるさと実習も中止になり、実践する機会が次々と奪われることへの不安が募りました。家でオンライン授業を受ける日々が続きましたが、唯一の楽しみだったのが同じ学部の友人とリモートで教育に関する話をすることでした。各自が教育に関する記事を持ち寄り、それについて意見を出し合いました。自分の考えを深めることのできる充実した時間でした。学び合いの大切さを実感しました。

附属小学校での実習では、先生方の授業や指導の様子を観察し、「いいな」と思ったことはすぐに実践するようにしました。一ヶ月という短い期間でしたが、自分の授業や指導の在り方を見つめ直し、ブラッシュアップさせることが出来ました。また、ご指導いただいた担当の先生の子どもたちと楽しそうに授業をする様子や、時に優しく、時に毅然とした態度で指導をする様子を見て、教員になりたいという気持ちが更に強くなりました。附属小学校の先生方との出会いにも感謝しています。

コロナ禍で思うようにいかないこともありましたが、大学で出会った先生方や友人とともに充実した四年間を過ごすことが出来ました。

愛媛大学卒業後、地元の小学校である鬼北町立泉小学校に配属されました。「大学で学べることは学んだ。あとは現場で実践するだけ。」と意気込んでいました。しかし、実際に現場に出てみると、うまくいかないことの連続でした。大学での実習では、学級も安定しており、学習規律も確立しているところに入って授業をしていました。ですが、これからは自分自身で学級経営を行い、学習規律を徹底させる必要がありました。四月の初めの三日間を「黄金の三日間」と言いますが、そう言われるほど重要な三日間であったことが後になって分かりました。実習と同じように準備をして授業に臨んでも、子どもが発問に対してふざけて答えたり、好き勝手に発言したりと思うようにいかず、悔し涙を流しました。主導権を子どもたちに持っていかれているように感じ、学級崩壊を起こすのではないかと怖くなったのを覚えています。理想と現実のギャップに苦しみました。まずは、自己開示をして子どもたちと沢山関わろうと思い、休み時間には積極的に声を掛け、学級の全員と鬼ごっこをして遊びました。そのため、打ち解けるのは早かったように思います。子どもたちと関わることで、横のつながりは出来てきました。しかし、縦のつながりを作るのに苦戦しました。指示を出しても聞かない、発問をしてもふざけて答える、静かに学習をする場面で私語をして教室が騒がしくなるなど、教師と児童の縦のつながりがあれば成り立つ学習規律や学級のルールが一切成り立ちませんでした。何をどうすれば良いのか、どこから手をつければいいのかが分からず、悩みました。ただ、その都度、同じ学校の先輩の先生方や指導の教員の方に相談に乗っていただき、自分だけで解決しようとしていたときと比べて、気持ちが楽になりました。また、具体的なアドバイスもいただき、「よし、やってみよう」と前向きに考えることが出来ました。授業面でも、自分の授業力の無さを痛感する場面が多々ありました。子どもから、「あと何分で休み時間ですか。」「授業が長くてつまらない。」という声が上がったとき、悔しい気持ちと情けない気持ちで一杯になりました。子どもたちの「授業が楽しい」「もっと学びたい」という思いを引き出せるようになるのが、今後の目標です。

同じ境遇にいる初任者の友人にも、日々支えられています。逃げ出したくなることがあっても、あの先生も頑張っているから私も頑張ろう、と自分を鼓舞することが出来ています。また、定期的に会ってお互いの課題や困っていることを相談することで、それぞれの失敗を次に生かすための方法を模索したり、自分を俯瞰して冷静に分析したりすることにつながっています。自分にとって必要な時間であり、貴重な時間です。忙しい日々の中で、時間を作って語り合える友人がいることのありがたさを実感しています。

辛いこともありますが、教員をやってよかったと思えることも多々ありました。その中の一つに音楽会があります。町内で行われる音楽会に向けて、音楽主任として器楽合奏の指導を行いました。教員になったらやりたいことの一つが、音楽会で指揮をすることでした。いざ、指導をしてみると、自分が演奏するのと指導するのでは全く異なり、一つの音楽を創り上げることの難しさを実感しました。しかし、熱心に練習をしてくれる子どもたちや、全体練習に毎回来てくださり、共に指導をしていただいた先生方に助けられ、無事に本番を笑顔で迎えられることが出来ました。貴重な経験をさせていただきました。

多くの壁にぶつかりながらも、周囲の方に助けていただき、前に進むことが出来ています。今の自分があるのは、周囲の方々のお陰です。これからの長い教員生活の中でより良い授業、学級経営を目指し、自己研鑽に励みます。そして、今ご指導いただいている先生方や関わってくださっている周囲の方々、これまで関わってくださった方々のご期待に応えられるよう、努力したいと思います。

学部トピックス

◆愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が二つのコンクールで全国大会出場を果たしました【八月三十日(水)、九月三日(日)】

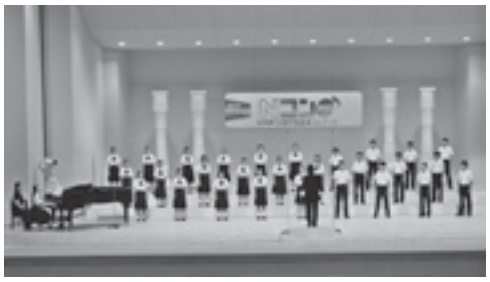
愛媛大学教育学部附属中学校コーラス部が、令和五年八月三十日(水)開催の第九十回NHK全国学校音楽コンクール四国ブロックコンクールにおいて金賞を受賞し、令和五年十月九日(月)に東京のNHKホールで開催される全国大会の出場権を二年連続で獲得しました。

また、令和五年九月三日(日)開催の第七十六回全日本合唱コンクール（JCA）四国支部大会においても金賞を受賞し、令和五年十月二十九日(日)に香川県高松市のレクザムホールで開催される全国大会の出場権を二年連続で獲得しました。

二年連続の全国大会ダブル出場という偉業を果たしたコーラス部は、現在、臨時部員を含む三十人で活動しています。今年度は「天歌夢奏」（聴いてくださる方の心を揺さぶる、世界に一つだけの合唱を創る）をスローガンに掲げ、日々練習に取り組んでいます。

全国大会本番でも、聴衆や審査員の心に響くハーモニーを奏でられるよう精一杯頑張りますので、応援よろしくお願いいたします。

NHK全国学校音楽コンクール四国ブロックコンクール賞状（金賞）



NHK全国学校音楽コンクール四国ブロックコンクールの様子

全日本合唱コンクール四国支部大会中学校部門混声合唱の部賞状（金賞）

全日本合唱コンクール四国支部大会中学校部門終了後の集合写真

放送大学入学生募集のお知らせ

放送大学では二〇二四年四月入学生を募集中です。

〈募集期間〉

二〇二三年十一月二十六日(日)～二〇二四年三月十二日(火)

放送大学はインターネットやテレビなどの放送を利用して自宅で学べる通信制の大学です。

放送大学では心理学・福祉・文学など幅広い分野を学べますが、同窓会員、特に現職の方々は次に掲げる教育関係の免許資格取得などができます。

○放送大学の大学院を利用して、専修免許状の取得が可能です。

○　放送大学の科目を利用して、特別支援学校教諭免許状の取得が可能です。

○　放送大学の科目を利用して、司書教諭資格の取得が可能です。

資料を無料で差し上げております。お気軽に愛媛学習センターまでご請求下さい。

放送大学
教養はエネルギーだ。
一科目からでも学べます
２０２４年度４月入学生募集中！
（2024年3月12日まで）
問合せ先　愛媛学習センター
TEL 089－923－8544
●インターネットで資料請求・出願できます。
放送大学　www. ouj. ac. jp
●資料請求専用フリーダイヤル
0120－864－600

2023 愛媛大学大学祭

コロナ禍のため３年間開催を見送られていた「愛媛大学祭」も昨年度から飲食を伴わないという条件で開催が認められ一歩前に前進していましたが、本年度は条件なしの全面解禁となり、11月11日㈯～12日㈰にかけて４年ぶりに飲食を伴う「大学祭」が開催され、やっとキャンパス内に賑わいが戻ってきました。

昨年度は飲食関係のバザー店ができなかったため盛り上がりに欠けた大学祭でしたが、今年はおでん、焼きそば、カレー、たこ焼き、クレープ、ピザなど定番の食べ物バザー店の他、学生たちが工夫を凝らした小物づくりやめだかすくい、○×クイズで今現在社会で話題になっている問題を考えるバザー店、さらにはワッフル、アイスクリーム、チーズケーキなどはやりのキッチンカーも数台参加するなど訪れた皆さんは思い思いの場所で楽しんでいました。

放送大学横のグリーンプラザでは、学生たちによる「新しい時代の幕開け」をテーマにした創作ダンスが披露され、多くの観客から拍手を浴びていました。

以下、大学祭の様子を記念切手形式で紹介します。

【教育学部４号館と２号館前でのバザー風景】

【法文学部と図書館前でのバザー風景】

【グリーンプラザでのダンス風景】

【教育学部玄関前でのバザー風景とキッチンカー】

キャンパス内を歩いていて感じたのはバザー店の数が少ないことでした。コロナ前はもっとびっしりとサークルのバザー店がひしめき合っていて、歩くのにも苦労したのを覚えています。聞くと、この４年間で20を超えるサークルが廃部になったり、休部になったりしているとのことでした。また、活動を維持しているサークルにおいても大学祭に参加したいと思ってもこの４年間で大学祭でバザーのノウハウ（テントの借り方、衛生面での配慮、食材調達など）を知っている先輩たちがいないため参加に消極的になってしまったとの声がありました。同窓会会員の皆さんが活動していたサークルが廃部になったり、休部状態なのは寂しい限りです。教育学部同窓生としてそれぞれのサークルのＯＢたちが何とか支援してサークルの復活や再開に力を貸せればと感じた大学祭でした。

◇教育学部生の思い

学びと成長の大学生活を振り返って

中等教育コース社会科教育専攻
小野寺弘倫

私は愛媛大学での四年間の中で大きく成長できたと思います。しかし、大学生活のスタートは新型コロナウイルスの感染拡大によって、思い描いていた明るいものではありませんでした。初めてのオンライン授業、サークル活動の禁止、実習の中止など、一人暮らしを始めたばかりの大学一回生には大きな壁となっていました。不安な中始まった大学生活の中で、大きく成長できたのは二つの活動です。

一つ目の活動は、「うわじま∞あいだいプロジェクト」に参加したことです。観察実習やふるさと実習がなくなったことで、教育現場に関わる機会がないことに不安を感じていました。大学二回生の秋に先生からお誘いを受け、プロジェクトに参加することを決意しました。コロナウイルスの感染拡大によって制限がありましたが、中高生と一緒にフィールドワークを行うことができてよかったです。地域の課題解決や魅力発見をテーマとしてプロジェクトを行っていき、オリジナルのプランを考えました。中高生と一緒に宇和島の魅力を詰め込んだ紙芝居をつくり、宇和島市学習交流センターに寄贈しました。また、参加した大学生で協力して総合的な学習の時間の単元プランを構想し、宇和島市教育委員会に提出しました。大学三回生の時は水産業と柑橘産業のコラボレーション案について、大学四回生の時は新たに作られる公民館のあり方について考えました。中高生の考えを引き出すポイントやフィールドワークでの視点の設定など、学校現場で生かせる多くの学びを得ることができました。

二つ目の活動は、「JENESYS 2022」に参加したことです。JENESYSとは外務省の対日理解促進プログラムで、台湾に行き、現地の大学生との交流とSDGsについての研修を行いました。大学三回生の春休みに台湾に行きましたが、初の海外ということでとても緊張していました。台湾の最古の寺院や「千と千尋の神隠し」の舞台といわれる九份などを視察したり大使館業務を行う日本台湾交流協会で講義を受けたりし、台中市役所ではSDGsの先進的な取り組みについて学びました。台中科技大学では台中市内のフィールドワークを通して、交通や環境、教育などの取り組みと改善案について台湾の大学生と話し合い発表しました。文化や性に対する多様性、政治に対する関心の高さについて話を聞き、社会科教師を目指す私には良い経験になりました。

これらの活動を通して積極的に学ぼうと考えるようになり、授業開発・実践を行ったり学会に参加して新たな学びを得たりしています。現在、社会科教育ゼミに所属しており、卒業後は愛媛大学教職大学院に進学する予定です。大学院でも学び続ける姿勢を継続し、中学校社会科教師としての力を高めていきたいと考えています。

最後に、ご指導くださった教育学部の先生方、活動でお世話になった関係者の皆様、ありがとうございました。

コロナ禍が教えてくれたこと

小学校サブコース
鶴原　紗恵

大学四年間。それはあっという間に過ぎ去ってしまいました。

大学一年生。晴れて合格の二文字が見え、待っていたのは華やかで煌びやかな新歓!!ではなく、新型コロナウイルスによる規制の数々です。全ての授業はオンラインで行われ、顔より先にzoomに映る同級生の字面の方が記憶されていきました。大学から出された課題も最初は分からないことだらけでしたが、友達もできず独りでやらなければなりません。私は幸いにも連絡を取ることができ、課題を教えてくれる子と仲良くなることができましたが、その子と実際に顔合わせができたのは入学後しばらく経ってからの対面授業であり、その時の感動は大きいものでした。

大学二年生。塾や飲食店、学校の放課後教室で働き、教員を目指す自分としては非常に学びになるアルバイトを経験できました。多くの授業で対面授業が再開し、人と話せる喜びを噛みしめ、人が隣にいながら授業を受けるというのが楽しくて仕方がなかったことを覚えています。授業が終わったらえみか（大学内にあるお店）でおやつを買って談笑するなど、理想として描いていた大学生活を送れていると実感しました。

また、友達の誘いで、児童文化研究会というサークルに入部しました。このサークルは教育学部だけが入ることができ、学校や市民図書館など子どもたちと関わる様々な学童の依頼に応えていきます。簡単なゲームなどのイベントを大学生だけで企画・運営することができました。活動日は週に二日なのですが、参加したい日だけ参加することもできますし、活動後には先輩がご飯に連れて行ってくださいました。

大学三年生。印象的だったのはやはり教育実習です。忙しく慌ただしい毎日でしたが、児童を間近に見られ、「この子たちのために」と思うことで頑張ることができました。組研（一つの授業を同じクラス配属の全員で創り上げるもの）が愛媛大学ではありますが、学校を定時に出て大学に籠り、大学が閉まるまでのかなりの時間、議論を重ねました。私達は国語の授業作りで、私達の思った単元観以上のものは児童に伝えることができないと担当教員にご指導頂き、この単元から何を伝えたいか、何が最も価値があるのかなどを熱く話し合っていきました。組研では対立することもかなりあったと周りの人からは聞きましたが、このような児童を思った熱い語り合いは必要なものであると私は思います。

さらに私は、フィリピン海外教育実習にも思い切って参加しました。フィリピンに行って一番驚いたことは貧富の格差です。郊外に行くと、古びた街並みであるのに、繁華街では驚くほど立派な建物があったりします。また、幼・小・中・高それぞれの授業も見させて頂いたのですが、フィリピンでは国語と社会の授業以外は全て英語で授業を行います。ですから、フィリピンも第二言語が英語であるにもかかわらず、みんな英語ペラペラなので驚いてしまいました。

大学四年生。ゼミ活動を盛んに行っています。宇和島愛大プロジェクトに参加し、フィールドワークなどを通して、宇和島を今まで以上に活性化するにはどうすればよいか、中高生とともに話し合っていきました。現在は卒業論文をなんとか書ききれるよう、ひいひい言いながら取り組んでいるのですが、それが終わればもう卒業でしょう。

長いようで短い大学生活。私がこの四年間を通して感じたことは、大学生は自分のしたいことをなんでもするべきだということです。私は大学生の間に多くのことに挑戦し、数えきれないほどの失敗を経験しました。でも、その失敗も私の中ではとても大事な学びや経験になっています。コロナ禍のような厳しい経験も当たり前の日常が当たり前ではないことや、日常こそが大切だと気づかせてくれました。コロナ禍だったからこそ、人との対面が何倍も嬉しく、協力できる喜びを肌で感じることができました。

充実した学びや楽しい思い出を沢山得ることができた愛媛大学に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

表紙のことば

近藤　喬
（教職員ＯＢ）

「皿ヶ嶺に咲く霧氷」

初冬の頃、私の家から四国山地を見上げると、雪の白さとは明らかに違う朝日をあびて輝く純白の皿ヶ嶺が見えることがあります。急いで山支度をして登山口へ、そんなことが何度かありました。

前夜から強風が吹き松山市の最低気温が五度を下回ると霧氷の付く条件が整います。そして、「霧氷にも旬があるんだよ」と、山の先輩に教えてもらったのは、登山道の笹の緑・きらきらと輝く純白の霧氷・そしてぬけるような青空、が揃ったときだそうです。

表紙の写真は　そんなあこがれの景色を求めて写してきたうちの一枚です。

身体をいたわりながら、これからも拙いのですが山の景色を私なりのアングルで切取っていきたいと思っています。

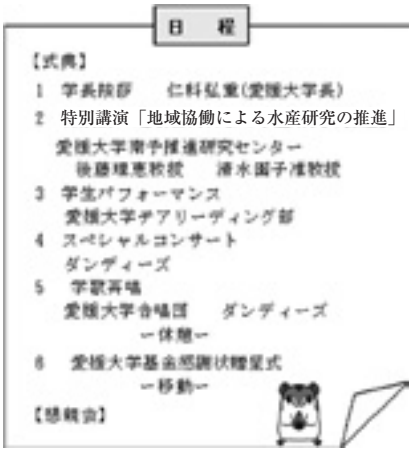
令和５年度　第14回愛媛大学ホームカミングデー

ホームカミングデーは、卒業生の皆様や教職員ＯＢの皆様に愛媛松山にお越しいただき、授業や研究、サークル活動に励んだ懐かしい青春時代を思い出していただくとともに新しくなった大学の施設見学や令和の学生祭に参加していただくことを目的に平成22年度から愛媛大学と校友会との共催で学生祭と同時期に実施し、今回で14回目の開催となりました。

今回は４年ぶりに懇親会が復活し、素晴らしい秋晴れの中、大勢の卒業生や教職員ＯＢら153人の皆様にご参加いただきました。

【式典】

式典では、仁科学長の開会挨拶の後、南予水産研究センターの後藤理恵教授と清水園子准教授から、「地域協働による水産研究の推進」というテーマで特別講演がありました。スマの完全養殖、高品質化の研究や宇和海の赤潮・魚病被害低減に向けた取組などを紹介されました。また、スマの美味しい食べ方、養殖の費用対効果の質問にも丁寧に回答いただきました。



講演をされる後藤教授と清水准教授

続いて、チアリーディング部によるエネルギー溢れるパフォーマンス、ダンディーズによるスペシャルコンサートの後、合唱団とダンディーズによる学歌斉唱で幕を閉じました。

チアリーディング部によるパフォーマンス

合唱団とダンディーズによる学歌斉唱

また、基金感謝状贈呈式では、大学の教育環境整備事業への支援に対して、仁科学長より感謝状が贈呈されました。

ホームカミングデーと同時開催イベントとして「Ａ：esＢＡＮＫ＆ミュージアム見学ツアー」と「Ｂ：植物工場見学ツアー」が開催され、移動の関係で人数制限はありましたが、参加者はそれぞれに楽しまれていました。

【懇親会】

今年は懇親会も復活し、大学会館１階「パルト」で、髙橋校友会会長の挨拶と乾杯の後、学生ＤＥＬＩ酒プロジェクトによる地酒の紹介、愛南町、久良漁港によるブリの解体ショー、じゃんけん大会など大いに盛り上がりました。

懇親会は立食形式で、乾杯は愛大ブランド「えみかビール」で行いました。また、宴席の周りには「スマ（伊予の姫貴海）」の刺身、いもたき、そうめんのコーナーが設置され、参加者は机上の料理ともども楽しんでいました。もちろん久良漁港のブリの刺身も振る舞われ参加者全員存分に久良ブランドのブリの味を楽しみました。

髙橋会長の挨拶で開宴！

懇親会後半には、フリーアナウンサーの合田みゆき氏による進行でジャンケン大会が催されました。景品には農学部産のお米や愛南町の特産品が用意され、参加者全員（子どもさんも含め）大いに盛り上がりました。最後には久良漁港の組合長からサプライズでブランドブリ１匹（約１万円相当）を景品として提供していただき、懇親会も最高潮に達しました。景品の「ブリ」をかけたジャンケンは小さな子どもさんが最後まで勝ち残り、自分の背の高さや体重ほどの「久良ブリ」を手にし、無欲の勝利となりました。

懇親会アラカルト

数年ぶりの懇親会会場へ

乾杯！

懇親会開場風景１

懇親会開場風景２

話題の「えみかビール」

飲んでますか

久良漁港の皆さんによるブリの解体ショー

ジャンケン大会（最初はグー！）

特別講演会「話芸・落語の世界」

令和５年11月16日㈭教育学部大講義室において落語家古今亭菊志ん師匠による「話芸・落語の世界」の特別講演がありました。

この特別講演会は「愛媛大学教育学部サポーター制度」の取り組みの一環として平成21年から実施し、今年で20回目の開催になります。この制度は、愛媛大学の教育学部を卒業し教職を含む多方面の分野で活躍している卒業生をお招きして「魅力的な話し方講座」として教育学部の学生に話をしてもらう取り組みです。今までにはアナウンサーや噺家等の「話術のプロ」、教育学部を退職された教職員等の「授業のエキスパート」、各界で事業を経営している「組織のリーダー」等多くの卒業生がサポーターとして登録してくれています。

令和２年からの４年間はコロナ禍で開催ができなく、実に４年ぶりの開催となりました。今回は落語家古今亭菊志ん師匠に講演をお願いしました。以下、講演について報告します。

【古今亭菊志ん師匠講演より】

講演は教育学部保健体育科准教授糸岡先生の進行で進められ、まず古今亭菊志ん師匠（以下、師匠と記載）の紹介がありました。師匠は平成６年に教育学部小学校教員養成課程を卒業し、過去２度（平成21年度・平成26年度）このサポーター制度の講師として講演され、今回は３度目の講演となります。今回のテーマは「話芸・落語の世界～落語にコミュニケーションのヒントあり～」で約80人の参加者は師匠の軽快な語り口を楽しみながらその話術を楽しみました。

はじめに小助川教育学部長よりご挨拶をいただき、その後講演に入りました。

師匠としては、どのように話を進めていくか悩まれたようですが、トークショー的な感じで進め、できればワークショップも取り入れたいとのご提案がありました。まず、参加者に「落語を聞いたことがない人」と問いかけられましたが、誰一人手を上げる参加者はいませんでした。その後、参加者が分かりやすいテレビ番組の「笑点」を例に挙げ、「笑点」の大喜利は、数人が座って行う頭の体操というか頓知ゲームをするものであり、「落語」は一人で座って右を向いたり左を向いたり、登場人物を描きわけながら話を進めていく違いについて話されました。その後落語を構成している枕～本編～オチの話があり、自身の愛媛大学入学から落語家になるまでを枕として実際に登場（お囃子はなかったですが、）から落語までを実際に演じていただきました。

この日の落語は、寄席や演芸場に行けば必ず１日に１回は演じられているといわれているお酒を飲ませてもらおうとした男が、赤ん坊を褒めようとする古典落語「子ほめ」を披露し会場を沸かせました。落語を終えた後、参加者に感想を聞き落語の構造（まくら～本編～オチ）や落語は芝居からきているため上手（客席から見て右）に家がある設定であることなど学校の授業の導入や構成にも活用できるアドバイスをいただきました。

落語の実演を終えた後は、師匠が落語家として人前に出て落語をしながら気をつけていること、注意しながら話をしていることを中心にした話術のコツについて具体例を交えたお話がありました。

話術のコツとしては、①つかみの大切さ、②一本調子にならないこと、③口頭以外の表現（身振り、手振り）、④聞いてもらうための裏技（聞き手に合わせて話を変えていく等）の４点について次のように話をされました。

①まずつかもう

落語で大切なのは「まずは客をつかむこと」です。客をつかむということは味方にする、聞きたいと思わせることです。具体的に言うと今日「まくら」で自己紹介をし、皆さんと共通の話題になるサークル活動をテーマにして学生時代の落研（落語研究会）の話からプロに入って学んだ社会で大切なことを中心に話して本編に入りました。かといって「つかみ」は何でも良いかというとそうではありません。不特定多数のお客さんを相手にしますので、疎外感をもたない内容、例えば誰でも親しみのもてる食べること、誰でも見る夢の話、異性関係のこと、お金がないと生活できないのでお金の話等です。皆さんの関心を引き付けてそれから導入から本編へ流れて行くと、皆さんも知らず知らずの内に聞き入り、気が付いたら講演の中に引き込まれていたようなそういう学校の授業になるととてもいいかなと思います。

講演会の様子1

②一本調子にならないこと

話をするときには場がしらけないよう気を付けています。例えば、葬式のお経は退屈です。まずは内容が分からない、テンポが一本調子というのが大きな理由と考えます。このことを反面教師にし、声を大きくしたり、小さくしたり、間を取ったり、低い声、高い声、ゆっくりしゃべる、早くしゃべる等していくと話の中に起伏みたいなものができて聞いている客が素直にスーッと話の中に入り聞き入ってもらえます。いわゆる「話し方の味付け」ととらえてください。要するに変化がないと人間は退屈になるということです。

③口頭以外の表現

落語は一人で複数の客に話をしています。皆さんに疎外感をもたせないよう一番後ろの人に対して話しているように話します。声を張り上げるのではなく、気持ちの中でです。また、落語の場合は正座したらそのままで頭しか動かさないのではなく、特に目線だったり、表情だったり、身体位置だったり、道具を使ったりなど手や身体を動かして退屈させないようにします。大事な所は特に手や動きを大きく入れます。文書で大切な部分にラインを入れたり、文字の太さを変えたりするようにです。

④聞いてもらうための裏技

落語家は話をアドリブ的にしています。その日の演目は何をするか決めていないのです。その場で考えているのです。寄席の演目は「やった者勝ち」で寄席に行ってみないと誰が何をするか分からないのです。だから決めていません。お客を見て決めることが多いです。ただ、気を付けていることは、聞いている人に寄り添うように話をする、一方通行にならず皆さんがどう思っているか考えながら話します。こうなった場合、こうならなかった場合などしっかり準備して選択肢を沢山用意していくことです。（ビジネスのプレゼンや学校の授業に共通）

ワークショップ「即興でネタを披露する学生」

このように落語について話される中で、教員を目指す学生さんたちに授業での話し方や展開の仕方についてのアドバイスを多くしていただきました。

最後に学生さんたちから質問を受け、その中に「ワークショップとは？」との質問が出たため、学生さんの代表に舞台に上がってもらい実演してもらいました。突然のフリにもかかわらず「まくら」から「本編」、さらには「オチ」まで師匠も驚くほどのできばえを見せてくれ、最後まで笑いに溢れた講演会でした。

先輩を偲ぶ

あしあと(10)

先輩たちのあしあと

（教育学部同窓会百周年記念誌より原文のまま抜粋）

恩師素描

愛媛県師範学校
山本　徳行氏寄稿
（大正六卒）

赤井先生

その頃二部生の寄宿舎は古町駅前の料亭「すし菊」を借りて校外にあった。私はその幹事を仰せつかっていた。その晩は月がよかった。寮生達は前の広場一ぱいに遊びうかれていた。「今夜は郵便局長のお話がある、一同講堂に参集せよ」と示達されていたのであるが、寮生達はサボッてだれも行かなかった。盆踊りのはやしを歌う者もある。と、舎監の赤井米吉先生が来られたのである。もう十時をまわっていただろうか。

二階の広間に、一同はかしこまった。――何と言ってしかられるだろうか。しかられるのはだれも恐い。神妙に正坐して動かないでいる。

「二人居ないじゃないか。」

「はい。藤田と森が届出外出をいたして居ります。」

私はこう答えた。その中にお小言が始った。藤田はようやく帰って来たが、森は帰らない。幹事は全く気が気でないのである。

こうして一通りのお小言も終ったころになって、森はよもや舎監先生が見えているとは露知らず、酒で顔をまっ赤にしたまま、いい気になって、よろめきながら階段を登って来た。

「森――」

一喝――。先生のお顔は見る見る中にまっ青になっていた。師範の規則では「酒・煙草・女」は絶対禁制。しかも聴講を怠り、袴もつけずに外出、門限違反。森は酔いも一瞬にさめてうなだれてしまった。

「お許し下さい。先生、お許し下さい。」

一同はそっと先生を見あげた。先生はグッとのみこんで黙っていられた。そしてまっ青なお顔から、ハラハラと涙をこぼされた。そして、やゝして後、意外に大きな声で、

「許すぞ、許すぞ。」――「赤井も許す。」――「学校も許す。」

「しかし森修、お前――お前、お前の心が許すか。――お前の心が許すか。」

と、胸をはたはたと叩いて叫号せられた。

先生は、ハラ〳〵と落ちる涙を拳でこすっていられるのであった。

森はこの後、何のおとがめもなかった。先生も学校も許されたのであろうか。

武政先生

赤井先生が小浜の水産学校に栄転せられたので、後任に武政太郎先生が赴任せられた。そして心理学を講義せられた。先生は後年、東京教育大学の教授になられ、日本心理学界の泰斗として君臨せられた方であるが、当時は失礼ながら心理学はまだ素人であった。（元来が英語の先生である）だから武政先生の心理学に関しては、私は最年長の兄弟子だと吹聴してだれも異論を言う者はない。

赤井先生の熱情に対して武政先生は理知の方であった。冷ややかな冷笑を浮べて「君達は虫編（蚊士）だからね」とすましていられる。

その頃私は高島・越智などと、歌や俳句、それに小説の真似ごとを書いて得意がっていたものである。もっとも高島や越智が私よりは一枚も二枚も上等であったが。

塩月先生

芸能の先生には、塩月桃甫先生があった。

「頭のよい者に、絵のかけないはずはない」

と、先生のおだての言葉にのってほとんど毎日の放課後、それから休日には画板を携えて神妙に写生に出かけたものである。生来絵はかけないものと自らあきらめていた私もずいぶん描いた。その頃の作品が今も数多く残っているが、今は描けないと思われる名作もある。全く先生に魅せられていたと言ってもよい。美術の点は九点であった。

愛媛青年教育発祥の地に思う

愛媛青年師範学校
一色　春男氏寄稿
（昭和一七卒）

私が青年学校教育養成所に入所したのは昭和一五年の四月でした。当時は修業年限は二年でした。忘れもしません、二年生の教練の査閲をうけていたとき、昭和一六年一二月八日にあの大東亜戦争が勃発したのです。ですから学校の教育も国の方針にのっとり、戦時色の濃い教育になっていました。私たち若者も勤労青年の教育の道ももちろんだが、いずれ兵隊さんに行かねばならぬ、そうすれば上等兵で終わったのではいかぬ、どうせやるなら目標は将校にならなくてはというので、教練には一生懸命はげんだものです。学校時代の教練で将校適任証をもらっているのといないとでは甲種幹部候補生に合格する率が大分違うということを、昭和一二年支那事変以来出征していた先輩諸子から聞かされていたので、教練にはよくはげんだものでした。

また、田中円三郎所長には、「指導原理即指導人格」「我燃えずして教育いかんせん。」ということで教育者としての根本精神をたたきこまれたものでした。また田中所長の方針が実行を伴わない教育なんてありはしない、倶学倶行を信念にしていましたので学校は全寮制で二四時間教育できびしい教育でした。朝の起床・朝礼・朝掃除・食事・勉強・終礼等、規則正しく今の若者たちには耐えられないくらいきびしいものでした。農業の実習など耕心農場での訓練等軍隊のそれよりもきびしいものでした。だから青教を出ていれば軍隊へいっても楽をする、甲幹には通るという世間の評判でした。また、二四時間教育ですから金村先

生の哲学の時間等「東洋倫理概論」（安岡正篤著）を教科書にしての授業、そしてチョークのさきをもたれてきれいにかかれる板書、しかしよくいねむりをしてしかられたこともしばしばでした。黒河健一先生の準備ある熱心な国語教育、玉井先生のおとなしいが経験豊かな農芸化学の授業等三〇数年たった現在でも忘れ得ません。青年師範は昭和四年に実業補習学校教員養成所として第一回の卒業生をだし、昭和一〇年に青年学校教員養成所として山越に独立し、同一九年には青年師範学校と改変され、昭和二七年愛媛大学教育学部へと発展をしています。したがって同窓会も昭和二五年九月に男子師範・女子師範・青年師範の夫々の代表者が集合、協議の結果、従来の同窓会を解体し、愛媛大学教育学部卒業生を迎え入れて「愛媛大学教育学部同窓会」として現存しているしだいです。

今年は愛大創立百周年だということで、我々青師の同窓生ももちろんこれには協力援助をおしまないが、せっかく我々が倶学倶行、師弟同行で、うるわしい師弟愛、同窓愛をはぐくんで来た山越の青師跡に男子師範学校の跡の石碑のようなものを建立し、長く往時を偲ぶよすがとしてはとの同窓生の声が県下各地でにわかにたかまり、昭和五〇年一一月の宇和島市における校長研究会で松山市案を提出し大方の賛成を得たので、正式に発起人会をつくり県下の卒業生によびかけ建立の準備中であります。

早ければ夏、遅くとも秋には、御幸町旧青師跡に「愛媛青年教育発祥の地」の碑が建立されることになるでしょう。卒業生約八〇〇名（校長六二名・教頭五八名・現職教員二三〇名・OB四五〇名）、小世帯で同窓生の皆さんには親団体の百周年に加えて青師の子団体の石碑建立にご迷惑をおかけしますが、今やっておかねばできぬことなので、よろしく御協力御援助下さいますよう、発起人の一人としてお願い申し上げます。

萠芽の群像

愛媛大学教育学部
松原ユタカ氏寄稿
（昭和二六卒）

十年ひと昔ということばがあるが、今から二七、八年前となると二昔三昔前ということになるのであろうか。

人間が後ろをふり返ってみる時というのは、先ず現役からの退職の時、次は今の生活が非常に不幸な場合、反対に幸多過ぎてなすすべのない時、それから老後、うつらうつら、ああ、あのころは若くて元気でよかったなあと…。もう一つある。ありし日にやけつく思いを寄せた相手に巷でばったり出会ったとき、その時は何十年であろうがタイムマシーンが逆回転して昔が一瞬色鮮やかに蘇ってくるのではないだろうか。そんなことでもない限り、あまりにも恵まれた時代を過ごして来たためか、まるで霧のたちこめる彼岸をうかがうみたいなものだ。行く末の思案はあっても越し方の糸をたぐることは無縁の生活なのであるが、よい機会に恵まれたのでひと時をもう一度青春に遊んでみたいと思う。

昭和二三年の四月に愛媛師範学校に入学したのであるが、それから愛大の二年課程を修了するまでの前後の年を考えてみた時に、教育史の上からも大へん変動の激しい時期であったように思う。

先ず二一年、米国教育使節団来日（第一次）の報告書が発表され、戦後の新しい教育の方向に大きな影響が与えられた。新日本憲法が公布されたのもこの年である。二二年、教育基本法・学校教育法が制定され、六・三・三・四の学校制度ができた。二三年、新しい教育に関する法令が整備された。二五年、米国教育使節団（第二次）の報告書が発表された。二七年、中央教育審議会が設置された。こうした激変の中の昭和二三年という一年間は三津浜の旧女子師範学校で過ごした。

静かな建物と講堂のそばの夾竹桃とが印象に残っている。空き時間に男子の学生が海で泳いでいたこと、三津浜の町にあるダンスホールへ不特定多数と踊りに行ったことぐらいが懐かしい思い出である。さざめきの毎日が続いたある日とつぜん、来年度愛媛大学が設置されるという。「受験しようと思う者は受けなさい。愛媛師範学校でそのまま卒業しようと思う者は受験しなくてよろしい。」ということになり、三津浜での一年間は終わりをつげた。愛媛大学を受験するもの、旧師範でそのまま留まるもの等それぞれであった。

二四年度愛媛大学に入ってびっくり。博覧会終了後の木造バラック建ての校舎での勉強である。そこで受講する者たちは愛大を受験して入った者、旧師範学校そのままでいく者、青年師範の人たち、それ等が入り乱れて同じ講義を聞くのである。ときどき下駄の音が廊下に響いて講義におくれた学生が虫の居所の悪い先生にこっぴどく、しかられていたのを思い出す。戦後といわれるときで、学生の履物から着る物、その生活態度にいたるまで、言論も思想も全く自由で、今まで引き締めていたが、いっぺんにはじけて多様をきわめていたようだ。

社会科学研究グループというのがあって、マルクス主義の読書会のようなものがあったり、人生の一時期をそういったものに傾倒する若者らしい涼しく逞ましい眉を上げて論じ合っていたのを美しいことのように思い出す。また一方、マルクスもエンゲルスもクソクラエで、一日雀巣に入りびたり、学校へ現れるなり昨夜の麻雀戦のようすを事細かく大声で話していっぱしの悪党ぶっている者もいた。

戦争を実際に経験して外地から復員して学生生活に入った者たちの中には、せつないまでに何かを求めていた者もいたようだ。そうして真剣に悩み、熱心に講義に耳を傾けていた。期末テストの時「みんなで助け合ってやりなさい。相互扶助大いによろしい。」といって歯の立たないようなドデカイ問題を出してくれた先生がたまらなく懐かしく思い出される。

そのころ講義がはじまると、ただひたすら知識を求めてノートをしている一つの影を見た。それはやがて私の心の中で、夜明け直前垂直に尾を立てた大すい星のような存在となった。早春の光りの中を互いに、とある気配のように歩み寄った。それが現在生活を共にしている彼との出逢いである。

愛媛大学時代、それは特別に思い出さないかわりに、壮大な青春の叙詩としていつまでも忘れることができない。

会員の声

名聲超十方
―大拙・英訳「教行信証」の研究（続き）―

吉原　宏文
（昭四二卒）

私も遂に八十一歳となり、人生の終末をひしひしと感じるようになった。

今年も早半ば、ただ、印象に残る出来事があった。即ち、五月十九日、二十日、二十一日の三日間、被爆地広島市において、G7広島サミットが開催されたことである。広島出身の首相・岸田文雄氏の英断により、地元広島での開催が実現した。世界主要七ヶ国の首脳が、物々しい警備のもとに集結し、無事、緊張の三日間が過ぎた。ウクライナのゼレンスキー大統領の飛び入り参加というサプライズもあり、より大きな感動があった。原爆死没者慰霊碑への献花、そして、原爆資料館の見学等、各首脳は充実の三日間を過ごされたことと思う。究極の悪魔の兵器・原水爆弾の廃絶を目指して世界の世論が沸騰している。しかし、人間が造り出したものとはいえ、その制御は益々困難な状況となっている。

平和公園には、有名な「原爆の子の像」の塔がある。二歳のとき被爆した少女・佐々木禎子さんは、中学生になったとき、白血病を罹患し、千羽鶴に願いをかけ鶴を折り続けたが空しい結末となった。しかし、その祈りの心は、世界中の少年少女の共感を得て、彼女の塔に千羽鶴が奉納され続けている。

さて、大拙博士の英訳「教行信証」の続きに戻ろう。

㈣　浄らかなる国土に向う真実の宗派（浄土真宗）の教義を広く理解するために、我々は、阿弥陀仏と全存在者（一切衆生）との関係性の直下に隠れているあるものについて知らねばならない。阿弥陀仏と我々を結びつけているそれは何であるのか。菩薩が最高の悟りを成就しようと誓うとき、この娑婆世界（sahālokadhātu）に生きている我々全存在者の苦悩と悲惨について、彼は、何故、そんなに心配するのか。

阿弥陀仏の大智（mahāprajñā・妙智）について言えば、阿弥陀仏はとりわけ自己矛盾の形式である。彼の無限の光は、捺落迦（naraka・地獄）の中にさえ貫通する。それと同時に、阿弥陀仏は大悲（mahākarṇā）の具現化でもある。即ち、全存在者（一切衆生）を、あたかも彼自身の子どもであるかのように感じている。こうして、阿弥陀仏は、一切衆生の間に、彼の変化身（nirmānakāya・化身・応身）である法蔵菩薩として現れる。この事実は、彼が、世自在王仏の御前で四十八願（praṇidhāna・願）を宣言し、五劫（五つの長く数えきれない時間）にわたる倫理的かつ心霊的な厳しい修行をしたことによって明証される。五という数は計り知れない（asaṃkhyeya・無数・不可数）時間を象徴する。菩薩としての法蔵は、こうして、我々の中の一人として、我々に最も近づき易い存在となる。即ち、法蔵菩薩と全存在者（一切衆生）との間には一種の人間的関係が生じる。彼は、工夫して、有限な存在者の地位にまで降りてくる。一切衆生を、徹底的に理解し、彼らを啓蒙（悟り）へ導く最善の方法（upāyakauśalya・方便善巧・大方便力）を発見するために、彼らの全ての気苦労と苦悩と辛苦を共に分かち合うのである。

阿弥陀仏は、一切衆生を天国や遙か彼方の手の届かない何処かから見下ろしているのではない。阿弥陀仏は彼らの親様である。高潔（正義）と復讐との畏敬の念を起こさせる父親ではない。親、あるいは親しみを込めて、親様は、親性（親であること）の具現化である。それは、時に単独で、時に連帯して、父親と母親との両方（両親）を意味する。英語には、これと一致する言葉はない。親は、母であるか、父であるかの孰れかである。親は、無差別に両親の孰れかには適用されない。仏教徒にとって、阿弥陀仏は、母性と父性との両方、即ち親様を意味する。親密のこの感じは、真宗の信者（妙好人）・浅原才市翁（一八五〇～一九三七）の精神的態度を決定づけている。即ち、彼は詩っている。

私の親様、あなたに一度出会った。心底、あなたを思ったそのとき、私の親様。南・無・阿・弥・陀・仏―南・無・阿・弥・陀・仏。

親密の表現は、無限の光と有限の個別的存在との同一性の感じの爆発である。法蔵菩薩の四十八願（praṇidhāna・誓願）が、かくも奇跡的に真宗の心酔者（信者）の心に強く訴えかけるのは、この体験の事実である。こうして、阿弥陀仏の名前を発音すること（称名）は、彼らの存在のまさにその核心に触れる。即ち、彼らは阿弥陀仏の「呼び声」に心の底から身を委ねる。普通に、客観的に、阿弥陀仏の願を熟慮することは、真には、彼ら自身の心奥の存在から流出してくる願そのものである。彼らは阿弥陀仏である。彼らはみな、浄土そのものである無限の光と永遠の命を共有する。全存在者（一切衆生）は、元来、彼らの親様としての阿弥陀仏と共に浄土の市民である。彼らは、娑婆世界（sahālokadhātu・「現在の相関的世界」）を設立するために、一時的に浄土から出てくる。そして、暫くの間、彼らはその祖国を忘却する。しかし、浄土を思い出すや否や、彼らは、一度だけ、本国を訪問する。その出来事は、至高の啓蒙（悟り）の達成として知られる。しかし、その宿命はそこ（浄土）に長く埋められてはいない。彼らは、再び、兄弟達と姉妹達との間に現れる。彼らのために、彼らと共に働き、結局は、娑婆世界（sahālokadhātu・忍世

界）は、浄土そのものに他ならないこと（生死即涅槃）を理解させるのである。

(五)　今、願（誓願・praṇidhāna）の意味はその本来の意味を回復し、力学的に、自らを立証し始める。これから述べることは、それについての私（大拙）の解釈である。

願は、誓願の短縮された形であり、praṇidhānaは、その本来の梵語（サンスクリット）の形である。praṇidhānaの原義は、〝（高度に宗教的な）強い願望〟を意味し、私がこれまでに書いた仏教テキストの大半では、これを〝vow（誓い）〟と訳して使ってきた。しかし、親鸞の著作（教行信証）のこの翻訳では、私は、〝prayer（祈り）〟の方が〝vow（誓い）〟より適切であると考えるようになった。〝prayer（祈り）〟は、キリスト教的味わいをもつと言われるが、私の〝prayer（祈り）〟は、何かGod（神）に特別な善意を求めることではない。それは単に、熱烈で真摯な願望、あるいは決意を表現する。つまり、何か具体的に定められた結果や報酬や恩恵や補償を期待することではない。この絶対的な信心深い意志は、愛、Agape（アガペー）、大悲、大慈である。それは、いかなる種類のお返しも予期しない。高・低いかなる方面からも絶対的に自由で、無条件にスポーツ的（遊戯・vikrīḍita）であるより他に何の理由もない。これは、人が自分自身で体験しなければ、誤解を招くかもしれない。それは、春が来ると開花する花のようなものである。遊ぶことそれ自身が目的で行動する子どものようでもある。

厳密に言えば、これは、仏教で、遊び好きな超自然の力を示す（遊戯神通・abhijñāvikrīḍita）として周知されている。これは、「超自然性」（supernaturalism）の意味ではなく、全く「自然に」、ちょうど耳が聞く、眼が見るごとくである。

感覚の生得の機能は、その生得性のゆえに、スポーツ的であり、全ての面で制限されている我々人間は、存在と生成の不思議を見抜くことができないから〝神秘的〟である。その存在（本願力・pūrva-praṇidhāna-bala）に埋め込まれたその〝根源の力（orignal power）〟から発出する阿弥陀仏の願（祈り）は、それ自身であるより他の目的には機能しない。彼の祈りは、彼の仕方で働くより他の目的を持たない。それ自身でのみ真である。阿弥陀仏の諸々の祈りは、人間的方法で表現される。自己―制限的存在である我々人間は、こうして、阿弥陀仏の祈り（願）を理解する能力を与えられる。我々は、諸々の願を人間的にわかり易い解釈に押し付けるべきではない。ここに含まれている自己矛盾は、我々の存在を内と外に取り囲んでいる神秘の一つである。至高の啓蒙（悟り）は、この神秘性を、静かに、穏やかに、喜びに満ちて、そして我々の全存在をもって受け容れることである。そこには、どんな疑問も出てこない。事実、親様の喫驚すべき図式（upāyakauśalya・善巧方便・大方便力）に関する全ての疑問は消滅する。

誓願（praṇidhāna）と本願力（pūrva-praṇidhāna-bala）のこのアイデアが、紀元第一世紀に初めて中国に紹介されたとき、人々は、これを理解するには、時間がかかることを予知できなかった。何故なら、そのアイデアは、老子（道教）と孔子（儒教）の信奉者達には最も遠い思想であったから。浄土教の思想が、第四紀の終りに向って中華帝国に広く受け容れられるのには、実に、三百年以上の期間が必要とされた。

祈りは、感覚的と同じく非感覚的実存の昂揚である。我々が、その人格の根本原理を掘り下げるとき、この祈り、この〝静かな小さな声〟を聞く。そして、それに気づくや、その声は、全世界の至る処に、ライオンの咆哮（説法獅子吼）のように響き渡る。その時まで、我々は、その声をいかに聞き逃がしてきたかを驚嘆する。その真相は、その声が、常に歴史的に条件づけられ、そして象徴的に伝統の神聖視された形で飾り立てられて我々の前に現れることである。今、畏敬の念をおこさせるその古くなった神話学的象徴を全て奮い取ったこの現実を提示してみよう。それは、程度の差はあれ、我々の前に平凡な姿で現れるかもしれない。しかし、現代人には、それは容易に理解されるであろう。例えば、経典に出てくる浄土（清浄の国土）についての仏教物語は、古代のインド、中国、そして日本史の鎌倉時代の人々には、妥当であると認識できるであろう。しかし、教養ある現代人には、多くの除去と洗濯を必要とすると思われる。

永遠の生命についての大きな経（無量寿経）の康僧鎧の中国語（漢文）訳における四十八願を通して、読者は真仏教（真宗）についての親鸞の基礎的解釈に近づくことができるであろう。何故なら、それは、主に、当時の支配的な古典的雰囲気をもつ学者達に訴えるために提示され書かれたものであるから。もしも、親鸞が、今、我々と共に生きていたら、彼はきっと経典を異なって、つまり現代の観念と合致して解釈していたであろう。

(六)　さて、真仏教の特質は何であるか？　即ち、〝自力〟と区別した絶対〝他力〟の教義である。仏教の他の学派によって多く語られている、いわゆる他力は、その信奉者達が主張するように、純粋ではなく、自力が混在されている。従って、阿弥陀仏の力への彼らの信心は絶対的ではなく、彼らが願うような浄土に彼らを導かないかもしれない。我々が、〝業の因果律（karma causation）〟によって制限され、条件づけられ、縛られている限り、我々は、決して啓蒙され、教化され、解放されることはない。我々が、有限から無限へと跳躍（横超）し、我々は元来、〝無生（anutpāda）〟であり、それ故に、決して「生死の法則」に縛られるものではないことに気づくのは、阿弥陀仏の無限かつ無碍の光に照らされ触れることによってのみである。（続く）

二〇二三年（令和五年）
六月十三日(火)

私の八十一歳の誕生日

私の今生の大きな夢は、鴻上尚史先生のように英語をマスターし、イギリスの友人・Judith A. Rouse さんの孫・Eoghan（オーエン・小学三年生）君に会うことです。

(〒731-0135　広島市安佐南区長束一丁目一八―五―五
明　静庵主)

フィンランド

井手窪　理
（昭三七卒）

フィンランドは、スオミともいう。沼人の国という意味である。一九八三（昭和五八）年五月、私はその国を訪問した。文部省派遣海外教育視察団の二五名の中の一員である。

一九日㈭現地時間一六時一〇分、ヘルシンキ空港に着陸。通訳兼ガイドのマリエッタ・マスダさんを紹介される。以後九日間この国に滞在するのであるが、本当にすばらしい女性であった。

二〇日㈮気温一五度　曇り後雨　ヘルシンキ市教育文化施設等視察。フィンランドの人口約五千万。人口密度一五人（南部に集中）ヘルシンキ約四八万人。政党数一〇。慎重に審議できるが、能率が上がりにくい。農産物は麦類、じゃがいも、根菜、きのこ。国の花はスズラン。フィンランド人は花の名前が分かり、木の名前が分かる。

フィンランド語は日本語と同じで母音で終わる言葉が多い。

元老院広場、官庁街、ヘルシンキ大学、朝市、大統領官邸、国会議事堂、スオメンリンナ要塞、学生会館、中央駅、南港、大聖堂、テンペリアウキオ教会、オリンピック競技場等。午後はサリーネンら三人の有名な建築家の住居兼アトリエ。人のよさそうな青い目の大柄な運転手の運転とミセス・マスダさんのガイドで、バスに乗って見学して回った。（写真1）

写真１

大学までいき身に付けた教養。日本人と結婚し、二児の母親でもある彼女は、いまも通訳として政府の高官と日本まで行き、また、日本から来る経済界の人や建築家などの通訳を続けている。彼女の話は、とてもすばらしかったし、いろいろなことを考えさせられた。

農業国から工業国へ変わったフィンランド。自然を愛し、自然の中でゆったりと生きているフィンランド人。日本の製品も沢山輸入しているこの国。そのかわりに輸出したくても、思うように輸出できない現状の悩み。地域暖房について語り、原子力発電所について心配しているマスダさん。

つつましい中に、明るくユーモアのあるマスダさんであった。世界中が平和で、仲良く生きていくことを心から願っているマスダさんであった。

五月二一日㈯快晴　気温一二度（日の出四時一〇分　日の入り二一時五〇分）

タンペレ市教育文化施設等視察（マスダさんのガイド）

ここからはガラス工場まで悪く言えば何もありません。けれど、緑はあります。ある心理学者によると、緑は人の心を安らかにするということです。どうぞ緑の風景を楽しんでください。

夏は、子どもは夕方九時まで遊びます。

フィンランドの四季は、春四～五月、夏六～八月、秋九～一〇月、冬一一月～三月。

夏休みは、六月一〇日～九月一五日（一年中で最も良い時期に休むという考え）

夏休みの宿題は無し。私の小学生頃は一つだけあった。それは、植物採集。今の子どもは私の子どもの頃より植物の名前を知らない。

農作物が余るので、農業をやめる人にお金を出している。もっとよい方法はないのかしら。

私が、日本や日本語に興味をもつようになったのは、祖父の影響。祖父はよく私に外国の話をしてくれた。それで、変わった文字を使い、変わった書き方をする日本に大変興味を持っていた。大学に入ってはじめて日本人に会った。それが私の主人です。

スウェーデン時代は、フィンランド語は教えられなかった。フィンランド時代になって、このファメリーナの町ではじめてフィンランド語を教えはじめた。すると、有名な芸術家が出だした。三人の画家とシベリュースがそれである。言葉こそ民族の誇りである。

フィンランドのフィンは、魚のうろこのこと。魚をよく食べる。東洋系の血が二〇％。北方のラップランドには日本人によく似た人がいる。髪の毛が黒く、目の色が茶色。

現在、国民に親しまれ、国民が誇りに思う大統領がいます。

湖の数は約六万。森林の面積は国土の七〇％。バスで走っても走っても畑と森。その新緑が実に美しい。

タンペレは、フィンランド第二の都市。人口約一七万。今日、タンペレに人が少ないのは、週休二日制により、ほとんどの人が別荘に行っているからだ。

シベリュースの生家でも、学校博物館でも若い女性が実に力強

写真２

く、誇らしく説明してくれたのが、印象的だった。（写真2）

五月二二日㈰快晴　気温二〇度

ヘルシンキ～ツルク

今日は移動日なので、午前中はホテルで日本への便りを絵はがきで六通書いた。

一二時ホテルを出る。バスで中央駅へ。昼食の品を買い、列車に乗り込んだ。一二時四〇分発車。まったく同じような地形が続く。見渡すかぎり畑と森。やはりフィンランドは農業国だ。

三時二〇分、ツルク駅着。ホテル「ハンバーガーブロス」は星五つ。最高級の近代的な真新しいホテルであった。

七時から夕食をとるために出かけた。途中思い思いに着飾った少女に出合った。マスダさんの話では、高等学校卒業祝いだそうだ。お祝いに五〇人の男性にサインをしてもらって帰るのだそうだ。四人の高校生はとてもうれしそうで、うかれていた。（写真3）

写真3

ツルクの街もどこでもすべて絵になる。川が流れている。アウラ川である。アウラ川沿いは菩提樹の並木道となっている。教会がある。思わずカメラのシャッターを押す。めざすレストランは、その川沿いにあった。（写真4）

写真4

五月二三日㈪晴　気温二一度

ツルク市人口約一六万

午前中、明日からの学校訪問の事前研修がすむと、川のほとり菩提樹の下で、歌の練習をした。指導は滋賀県の音楽教師安達道裕氏。道行く人、河畔に憩う人が振り返り立ち止まって、この様子を見ていた。中には拍手をしてくれる若者もいた。

午後一時から沖縄の新城英将氏と街の散策に出かけた。途中歩行者天国を通る。スーパーマーケットにも入ってみた。私たちが降り立った中央駅まで行った。駅前の広場で、ハンバーグ・青いリンゴ・ジュースを買って、昼食とした。ぐるっと回って、ホテルに帰ってきたのは四時半だった。街を歩く人の姿勢がよく、街には若者が楽しそうにたむろしていた。乳母車に赤ん坊を乗せた母親が買い物をしていた。街は平和であった。この北欧フィンランドの古都ツルクの街を歩いている自分が夢のようであった。やはり平和でなければならないとつくづく思った。世界中が。

五月二四日㈫晴　気温一二度

ホテルを九時に出発。教育委員会はアウラ川のほとりにあった。レイヨ・サルミ県学校教育部検査官は自ら役所の前で私たち一行を出迎えてくださった。若々しいゼントルマンであった。熱心な説明を受ける。

一二時、エスケリ中学校訪問（義務教育上級学校。校舎の中に高等学校、夜間学校と三つの学校が同居。）教育委員会の建物の対岸にある。学校に着くと、ヘレン・ロンカ女性校長が出迎えてくださった。職員室（日本と違ってソファもあり、休憩室といった感じ）で、いただいたプリントに従って日程説明があった。給食をいただき、授業参観。

四時頃ホテルに着いた。少し疲れていた。

五月二五日㈬晴　気温一一度

クピタ中学校訪問。九時着。市中心部から少し離れた郊外の住宅街と接した大きな公園の松林の中にあった。その環境からか、落ち着いた雰囲気の学校であった。この学校も高等学校と併設。

一一時過ぎにホテルに着く。班長、主任会。私は会計主任なので、その会に臨む。会計整理。

五月二六日㈭晴れ後曇　気温一四度

サンッパリンナ学校（脳性マヒ児対象）

ヨルマ・ランゲン校長自ら出迎え、私たち一人ひとりと握手で迎えてくださる。子どもも歌で迎えてくれる。我々団員の手を引いて教室まで案内してくれる子もいた。

夜は、学校訪問でお世話になったレイヨ・サルミ検査官とヘレン・ロンカ、ヨウコ・コルカ、ヨルマ・ランゲンの三校長をおまねきして、レセプションを行った。場所はホテル内のレストラン。私たちは何曲か日本の歌を歌ったりした。（写真5）

写真5

五月二七日㈮曇　気温一六度

バスでホテル出発。ヘルシンキ空港へ。途中雨になったが、ヘルシンキでは晴れてきた。何から何まで大変お世話になったマスダさん（松山市にも五～六年住んだそうだ）。ありがとうございました。スオミは、キートス（ありがとう）とイヨオ（イエス）でした。どこからもここからも、イヨオ、キートスが聞こえていました。私たちもキトスで九日間を過ごしました。本当にフィンランドよ、キートス。

フィンランドは、スウェーデンとロシアに挟まれた北欧の国。人口約五五五〇万人。一三～一九世紀はスウェーデン、一九～二〇世紀はロシア帝国に統治された。一九一七年のロシア革命を機に独立。冷戦期は中立を保ち、民主主義と資本主義に立つ一方でソ連との友好路線を堅持した。ロシアがウクライナへ侵攻した翌年の二〇二三年四月、北大西洋条約機構（ＮＡＴＯ）加盟。

俳句

句集『正面』より

島津　教恵
（昭三五卒）

万緑

（平成十一年～十七年）

ゆるやかに満ちてくる潮去年今年
城山より真一文字に初燕
兵馬俑の六千の黙霾れり
草餅にすいすいとあり草の筋
正面に城のある街水を打つ
祖谷渓の底万緑の川下り
頂に炎帝を置きピラミッド
千枚田の千の畦道曼珠沙華
宇野千代の明窓浄机秋海棠
晴三日続きて鶴の来る頃か

流灯

（平成十八年～二十三年）

城山へ谺ゆたかに斧始
ゆりかごの揺れを広げて流氷来
錦帯橋渡る花嫁風光る
覚えたての手話のおはやう若葉風
若葉光いま核入れし真珠貝
ヨーデルはこだまを呼べり雲の峰
沖へ出て流灯はなればなれかな
吾亦紅より広がれり草千里
雲も稲架も八重垣をなす出雲かな
馬の背てふ砂丘高きに登りけり

氷柱

（平成二十四年～三十年）

五十本の放水に虹出初式
千畳岩をとつぷり沈め春の潮
芽吹きとはけぶるにも似て雑木山
春灯のほつかり点り新家庭
旅疲れ足湯に癒し竹の秋
風呂を焚く頃いつも来て蟾蜍
藻の花や息をするかに水の湧く
きちきちと音も姿も光りけり
豊年の光の中へ着陸す
草の実の跳びついてくる力かな

部活動紹介

愛媛大学弓道部

私たち、愛媛大学弓道部は、現在二回生十四名、一回生十五名の計二十九名で活動しています（令和六年一月現在）。

愛媛大学弓道部は、月・水・金曜日の十八時から工学部棟五号館の西側にある弓道場で部員全員による合同練習を行っています。それ以外の時間は各自授業を受けたり、空きコマを活用して自由練習に励んだりしています。ここ数年はコロナ禍の影響もあり、度々活動が停止になったり、試合で応援の声が出せなかったりと様々な苦難がありましたが、最近はそういった状況から回復しつつあります。今年度は、合宿や対面での練習試合、定期戦での宴会など活動の幅が広がり、部員たちも活気に溢れていました。見学・入部はいつでも歓迎しておりますので、愛媛大学弓道部の方まで気軽にご連絡下さい。

〈活動状況〉

愛媛大学弓道部は、中四国学生弓道新人戦男女共に優勝、西日本学生弓道選手権大会男女共に入賞、四国地区総合体育大会男女共に優勝、全日本学生弓道選手権大会男女共に予選通過、中四国学生弓道選手権大会男女共に優勝を目標に掲げ、活動を行っています。中四国学生弓道新人戦は、新体制となってからの初めての試合になります。ここで勝っていいスタートダッシュを切りたいところです。西日本学生弓道選手権大会は、中四国と九州の全大学で争う大会となります。予選通過からとても狭き門ではありますが、普段戦うことの少ない九州の学生とリーグ形式で戦うことが出来るため、しっかり予選通過して勝ち抜きたいと思います。四国地区大学総合体育大会は、四国の全大学で競う試合となります。この大会で結果が出せないと、中四国学生弓道選手権大会での優勝は厳しいと思うので、気を引き締めて挑みたいと思います。全日本学生弓道選手権大会は、全国の大学で競う大会となります。全国の強豪たちと戦う機会はそう多くなく、試合を通して得られるものも大きいと思うので、しっかり予選突破したいと思います。中四国学生弓道選手権大会は、優勝することで全日本学生弓道王座決定戦に繋がるとても大切な試合になります。全日本学生弓道王座決定戦は、十一月下旬に伊勢神宮弓道場で開催される大会で、通称「王座」・「伊勢大会」と呼ばれています。各地域の春季リーグ戦の優勝校、及び全日本学生弓道選手権大会の優勝校の計十校がトーナメント形式で競い合う大会となっています。私たちの一番大きな目標はこの王座であるため、シーズン中の各大会で培ってきた経験を中四国学生弓道選手権大会でぶつけて、王座に出場したいと思います。また、この大会は一年間の活動の集大成に位置づいており、この大会が終わると三回生は引退となります。

こういった公式戦以外にも様々な大会や行事などがあります。一月には、三十三間堂大的全国大会があり、全国の新成人が集まり腕を競い合います。三月には八大学定期戦があります。今年は宴会もあり、他大学との交流を深めることができます。また、卒業生追い出し競射会と卒業生追い出しコンパも今年から出来るようになるそうです。五月には、新入生歓迎会と新入生歓迎コンパがあり、新入生との交流を深めます。八月には、小豆島で合宿があります。この合宿でより力をつけて残りの大会に挑みます。九月には、国立四大学定期戦があります。この大会でも宴会があるので、四国の国立大学さんとの交流が深まります。十一月には、学祭があります。今年度は、屋台でベビーカステラを出店しました。有難いことに想像以上に好評でした。来年度もよろしくお願い致します。

最後になりますが、日頃から愛媛大学弓道部に、ご支援・ご声援頂きありがとうございます。今後も弓道部の更なる発展に向けて日々積極的に活動に励んでいきたいと思います。

教育学部同窓会からのお知らせ

会報送付について

会報は、教育学部に関する行事や情報、また会員から送られてくる情報等を掲載し、毎年七月と二月の年二回発行しています。

皆さんにお届けする方法としましては、県外在住の方は事務局からの直接郵送、愛媛県内在住の会員の方は、基本居住されている小学校区の担当者からお届けしています。しかし、希望があれば事務局からの直接送付も選べます。その際は左記の「送料納付」を参考にしてください。ただ、切り替えには、時間がかかる場合があります。その間、小学校区からと事務局からの二冊届くこともあります。ご了承ください。

会報の送料納付について

会報の個人宛発送は、**送料を各自で負担**していただくことになっております。

出費多端の折柄恐縮ですが、未納の方は、左記要領で納付方お願い申し上げます。

記

①一年間五〇〇円で、二年間分ずつ収めるようになっています。

②二年ごとの更新は、煩さなので、何年間かを、まとめられる方もあります。

納付期限　毎年三月三十日までとし、二年毎に更新する。

送金方法　郵便為替・現金書留・郵便振替で

振替口座番号

〇一六四〇―七―二七五四

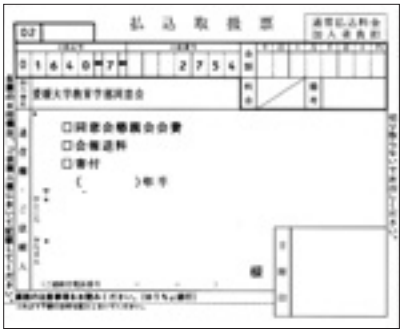
送り先　〒七九〇―八五七七

松山市文京町三

愛媛大学教育学部同窓会

領収書は、振替用紙をもって、かえさせていただきます。

振替用紙には、左記のように「懇親会会費」「会報送料」「寄付」と記載しています。送金の際には、該当の項目に✓をいれてください。なお、恐れ入りますが、卒業された年もご記入をお願いします。



用紙は同窓会懇親会が開催される年の二月発行の会報にチラシと一緒にはさんでお届けしますが、必要な場合は郵送いたします。郵便局でも常備されていますが、前述の記載はしていない用紙になります。また、郵便局で記入して送る場合は赤色の振替用紙をお使いください。

会報送付停止等について

会報送付の停止を希望する場合には、下記の２つの方法があります。

①　送料を振込み、事務局から送付している場合

会報表紙に記載されている事務局に連絡いただければ、次の号から送付が停止します。なお、連絡の際には封筒に貼ってある氏名右下にあるＩＤ番号とお名前をお伝えください。事務局員は、基本月・水・金の午前中業務についています。これらの日以外は教育学部の事務員の電話対応となりますので、特にＩＤ番号をお伝えください。

②　校区の小学校から送付されている場合

住まわれている住所を校区とする小学校の「愛媛大学教育学部同窓会担当者」に連絡すれば、会報の送付は停止します。事務局に連絡いただいても構いませんが、その際には「氏名と校区小学校」をお伝えください。事務局から該当小学校担当者に連絡いたします。

③　会報が２部届く場合

会報が２部届く場合があるかと思いますが、事務局からと校区小学校から届いていると考えられます。前述のように事務局から送付している場合は、送料が振り込まれている会員となりますので、恐れ入りますが校区小学校担当者に連絡をして停止をお願いしてください。

④　住所が変わった場合

住所が変わった場合には、事務局まで連絡をお願いいたします。また、送付しても２号（回）続けて「住所不明」で返送されてきた場合には、送付を停止しております。

「最近会報が届かない」と言われる場合は事務局に連絡をお願いします。

敬弔（物故会員）

（死亡年月日）	（氏　名）
5・2・14	岡本　恭子（昭31・愛　大）
5・4・27	清家　政夫（昭36・愛　大）
5・5・3	長曽我部壮二（昭32・愛　大）
5・5・5	岡本圭二郎（昭33・愛　大）
5・5・15	徳本　忠司（昭24・愛　師）
5・5・17	嶋田　嵩（昭28・愛　大）
5・5・23	鎌江　長次（昭28・愛　大）
5・5・27	京口　妙子（昭31・愛　大）

（死亡年月日）	（氏　名）
5・5・31	井原　愛子（昭11・女師二）
5・6・25	北尾　玲子（昭29・愛　大）
5・7・21	伊賀上圭介（昭34・愛　大）
5・7・29	黒河　健二（昭33・愛　大）
5・8・31	山下　和雄（昭35・愛　大）
5・9・7	尾崎多喜男（昭30・愛　大）
5・9・9	髙橋　弓弦（昭30・愛　大）
5・9・19	武井鬼代美（昭21・愛師女）

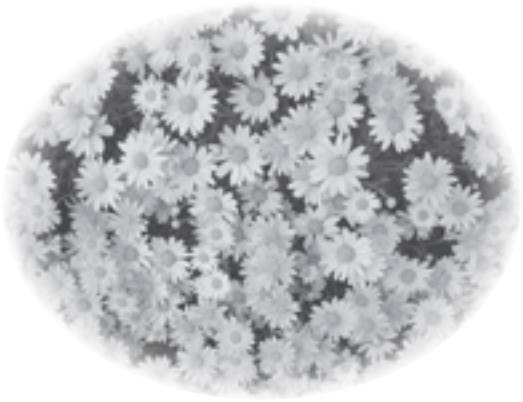
（死亡年月日）	（氏　名）
5・9・19	西村　春海（昭37・愛　大）
5・9・25	赤星　房男（昭25・愛　師）
5・10・6	上野　亮（昭27・愛　大）
5・10・11	石川　廣美（昭33・愛　大）
5・11・7	白砂　文男（昭24・愛　師）
5・11・13	野本　明男（昭32・愛　大）
5・11・21	金房　武寛（昭44・愛　大）
5・11・24	本宮　敏治（昭23・愛　師）

寄付者名

令和五年七月～令和六年一月

竹葉　修様
吉原　宏文様
井手窪　理様

※ 同窓会へのご寄付ありがとうございます



会員写真館

今回は春の愛媛大学構内の写真を掲載しました。春は学内いたる所に花が咲き誇っております。ぜひ、今年の春には母校に足をお運びいただき青春時代との違いを堪能してください。

社会共創学部前

法文学部横

文芸欄

版画「川井正の世界」パート４

川井正作品集より抜粋

石垣の里への想い

蒼い水辺

水車小屋